

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

第六十三卷

第五号



5

日本幼稚園協会

TOSHI



東京学芸大学 教育研究所—第10年報

## 幼・小教育の関連

—五つの問題点とその解決 試案—

A5判上製 価七〇〇円 丁二二〇

今日、幼小教育における重要性とその関連性が問題視され、大きな課題となっている。東京学芸大学教育研究所では、この問題について、教育学、心理学、教科教育学の教官と幼稚園・小学校の現場とが一体となつて、社会的適応、「聞くこと」、数概念、社会・自然の認識、体育の五つの問題点について綿密な調査・テストを行ない、それによつて、幼小指導における重複や指導の欠陥を指摘し、今後の問題点を提供し、示唆している。

### 中央幼児教育研究会編

辰見敏夫・角尾稔・日名子太郎著

### 保育研究法

改訂版

A5上製  
価一〇六〇〇

### 教師養成研究会・幼児教育部会編 幼児教育叢書全十巻

- |              |     |            |     |
|--------------|-----|------------|-----|
| 1 幼児の教育課程    | 価三〇 | 2 幼児の心理    | 価三〇 |
| 3 幼児の健康指導と体育 | 価三〇 | 4 幼児の社会性指導 | 価三〇 |
| 5 幼児の自然観察    | 価三〇 | 6 幼児の言語指導  | 価三〇 |
| 7 幼児の音楽リズム   | 価三〇 | 8 幼児の絵画製作  | 価三〇 |
| 9 幼稚園の経営管理   | 価三〇 | 10 幼児の両親教育 | 価三〇 |

学芸図書 株式会社 東京都千代田区神田錦町1丁目 振替東京 96491

## フレール館の 新刊音楽書

保田 正 編著

教材とピアノ・レッスンのための

### 新しいマーチ

子どものリズム感を養うためには  
まずマーチから！

- 保田正先生の新しい編曲
- 学校の教材用またはバイエル併用ピアノ・レッスン用として好適の行進曲集
- 童謡から世界の名曲まで86曲が網羅されています

A 4判96頁

定価 400円

まど・みちお 作詞  
磯部 俣 作曲

### ごはんを もぐもぐ

—おかあさんと幼児のための  
歌曲集—

- 幼い子どものためにとくに考えて作詞作曲された曲集
- まど先生のポエジーと磯部先生の新鮮なリズムとがぴったり拍子をそろえた楽しい曲集
- 44曲、各曲解説指導つき

B 5判92頁

定価 300円



# 幼児の教育 目次

——第六十三卷 五月号——

表紙 鈴木寿雄

幼稚園、保育所、家庭……………牛島義友(2)

都市生活と幼児の健康教育……………上村菊朗(6)

新しい幼児教育の実践

☆長等幼稚園フラン……………(11)

幼稚園参観記……………(12)

☆「あそび」の指導の実践的研究……………長等幼稚園(19)

協議会「長等幼稚園フランをめぐって」……………(32)

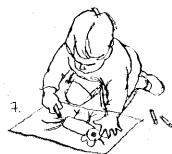
ヨーロッパの旅(一)……………平井信義(43)

ガンバリの力を育てる遊びと素材

(その一)ビー玉……………清水エミ子(49)

# 幼稚園、保育所、家庭

牛 島 義 友



今年は幼稚園新教育要領が示され、厚生省家庭児童局では保育所に対しても強力な施策を立てようとしているし、また文部省社会教育局、においてはごく最近に家庭教育資料を発表しようとしている。幼児童殊に幼児の生活や教育に関してこれほど国をあげて関心を示し、具体策が講じられようとしている年はいまだかつてなかった。二十世紀は子どもの世紀であるとの宣言が、わが国においては今日はじめて実を結ぼうとしている。幼稚園教育要領は昭和三十六年三月一日教材等調査研究会幼稚園小委員会が組織されてから百数回の委員会、その他、数十回の小委員会を重ねて作成されたものである。その回数聞いただけでも今度の案がいかに練りに練ったものであるかが分る。委員の中にはいろいろの意見の人がおり、それぞれが良心的に自己の立場を主張したからこそ、それだけ多くの回

数を必要としたのである。したがって出されたものはできるだけ単純化し、いろいろの解釈を許す余地を残しながらも主要な原則的なものをはっきり打ち出したものと思われる。委員たちとちがった考え方をする人でも、この中に入りこれだけ長く論議をすれば、おそらく同じような結論に到達したと思われるから、いわば今日における幼稚園教育の最高の意見を結集したものと見てよいであろう。この新教育要領のねらいの基本的キーポイントは

- 一、各幼稚園において適切な教育過程を編成すること。
- 二、新しい教育要領を確実に実施するようにすること。
- 三、幼稚園教育の独自性を十分發揮するようにすること。
- 四、道徳性の芽ばえをつちかうようにすること。
- 五、しつけをよくし、たくましい子ども、考える子どもを育てるよ



うにすること。

六、総合的な指導を行なうようにすること。

皆もつともなことがらであつて抽象的な原理としては何人も賛成することであろう。特に各幼稚園において独自のカリキュラムの編成をうたつてゐることは個々の幼稚園側で要求したいことを逆に文部省側から明示されたわけであるので、全く文句の言ひようのない立派な原則である。しいて言へば今更こんな事を言われなくてはならないほど個々の幼稚園が自主性がなかつたのかと自分をせめる位である。

最近の人づくりムートは、幼児期の家庭教育に焦点が向いてきたので、厚生省も保育所や家庭の育成に本腰を入れるようになり、保育部会が設けられて慎重に審議されておる。また従来はとかく養護児童や非行少年のような問題児の保護を中心としていたのを、健全育成という積極面に力を向け更に家庭を重視して家庭児童局と改称されたことも画期的なことであろう。保育所において行なう教育的部面は幼稚園教育要領を取り入れながら保育所としての独自の使命をますます強力に実施しようとしている。

他方文部省はもっぱら学校教育に力をそそぎ、家庭教育にタッチすることをさけていたのが、今やこれに対しても強力な指導を行なうとしてゐる。出されるものは「資料」にすぎないが、その影響力の重要さを考えて、文部省としては異常の関心と細心の配慮を注

いでゐる。私自身この仕事に参加したのでよく分るが、委員会にはいつも局長が出席され一応書き上げた資料を局長自から数十回読んで全部暗記した位と言われるほど、一字一句に気をくばられた。

このように幼稚園教育、家庭、保育所での積極的指導が現実の政策として実現したことはしばしば書くように画期的なことなので、その結果に期待すること大きい。この三つの面から互に協力してわが国の幼児教育、児童問題の解決に同かうのが望まれる。

ところがこの三つはそれぞれ独立したもの、したがって異質的なものである。三者の協力というのもこの独立性を尊重した上でのものでないと却つてなわ張り争ひになったり、屋上屋を架するようなことにならぬとも限らない。調和的協力のためにはまずその独立性をはつきりさせておくことが大切ではなからうか。

#### 幼稚園と保育所

幼稚園と保育所とは対立しているようにとられ、両者の一元化を主張する人もいた。昨年の十月に文部省初等教育局長、厚生省児童局長の名で幼稚園と保育所との関係について共同通達がなされた。

これは両者を一元化したのではなく、むしろそれぞれの機能を改めて再確認していったものであり、それだけに保育所の幼稚園化などは望ましくないものとして非難されてくる。保育所は保育に欠けている児童を対象として主として働らく母親の子を問題とする。都会では働らく親と言へば五時頃まで勤務するので保育時間もそれ以上

長くなければ役立たない。ところが農村地帯になると必ずしも職場に通勤しているわけではないので、四時頃までの保育で十分な所もあるし、もう少し早く切り上げて別な文句は出ない。それで時間的にいっても幼稚園と余り変りのないような保育所が現われている。また「保育に欠ける」という考え方を広い意味にとれば環境全体が保育に欠けるとみて部落ぐるみの保育をすることもあろう。更に保育所だと措置されれば費用が安くてすむし、設備の増改築については国の補助が得られるので当然幼稚園に向かう子どもが保育所に行っている者も少なくない。長野県などはこの点が指摘されている。これらの点を整理するのは当然のことではある。両者のけじめがはっきりしないと一元論が出たり、縄張り争いや対立意識が生まれてくる。また幼稚園だけで保育所のない場合は、働らくお母さんが困るのも明らかなことであるから、両者を、元化したり、四才以上は幼稚園、三才以下は保育所と年令で区切ってみても問題は解決しない。幼稚園と保育所とは異質のものであることをはっきり知ることが大切である。しかしそれは幼稚園は教育する所で、保育所は教育せず託児だけをする所とか、幼稚園は金持の子が行き、保育所は貧乏人の子が行くというような意味での差異であってはならない。保育所の「自由遊び」は従来とても幼稚園教育の内容をそのまま取り入れていたが、今回幼稚園教育要領に準ずるならば幼稚園は「教育」をする所であり、保育所は「教育と養護」をする所とな

ろう。また働らく母親は貧乏人とは限らない。母親自身の教育や才能を生かすために仕事をやめたくない人もふえてきた。このような職業婦人のための施設が一層考えられねばならない。この場合に職場単位に保育所のあることは非常に好都合である。また最近、新しい都市住居形態として団地ができています。団地人と地元の人とはその考え方や利害が必ずしも一致しないので団地だけの保育所も望ましい。ところが、このような特定人を対象としたものが保育所として公認されず、無認可保育所とされるところに問題があらう。またドイツの例から考えると、保育所は公立の施設としてますます立派となり、幼稚園の方は設備の点ではるかに劣る傾向がある。こうなれば貧富の偏見から来るところの一元化論は消えてくるであらう。幼稚園と保育所はそれぞれ別個の機能を果すものとしての理解と協力が必要である。

#### 保育所と家庭

保育所においては三才以下の乳児保育が一番欠けており、必要であると言われる。しかし、だからといって乳児保育を積極的に拡大し、希望者が簡単に子どもも託すことができるようにするのが果して望ましいかどうか疑問になる。この年令の子どもは家庭で親が養育するのが最も自然であるので、この点で家庭と保育所と対立してくる。保育所の完備した社会が必ずしも理想の社会ではなく、保育所を必要としない社会の方がよりのぞましい社会である。家庭で

育てたいにもかかわらず、むりに母親を働らきに出すのは最も悪い社会である。故に保育所に熱心の余り家庭の機能を軽視するような考え方はまちがっている。一方母親はすべて家庭に帰って子どもを育てよと強要することも女性の人間としての自覚を蹂躪する場合もある。経済的理由でいやいやながら仕事に出る親には家庭を与えるべきであるし、自分の天分と使命を生かすために職業にすすむ婦人に対しては、保育所を用意してやる必要がある。今日保育所はもっぱら経済的理由で働らく母親のための施設として設けられ、利用されているところに問題があるとも言えよう。

### 家庭と幼稚園

幼児教育即幼稚園教育振興を考えるのはあやまっている。幼児教育を充実するということは、家庭教育を第一に考えるべきである。

この家庭教育と幼稚園教育は必ずしも両立するとは限らない。家庭教育で欠けている社会性だけを養ふのならば相補なうものとして両立する。しかし、幼稚園教育が非常に行きとどきすぎ、幼児期において必要なよいしつけも道徳的教育も情操教育も何もかも幼稚園でやるとなると家庭ですることがなくなってくる。幼稚園でやっていることを模範として家庭ではその通りに実行せよというふうになつてくると、幼稚園が主で家庭は従となり、なくもがなの存在となるかもしれない。本来子どもを教育するのは親の自然の義務であり権利であつた。ところが、学校教育が発達するにつれて親の教育権

が制限されてきた。たしかに高度の知的教育をほどこすには学校教育に頼る他ない。だからと言って教育のすべてを学校に委ねてしまいい、しかもできるだけ早くから学校教育にうつすことが果してよいことであろうか。家庭教育の重要性を自覚し、努力する親は学校教育に対し、「まった」をかけたい気持になるであろう。幼稚園と家庭との連絡ということが新教育要領で重視されているが、連絡以上の家庭指導となると行きすぎることも注意せねばならない。また親が子どもを教育する権利と言っても学校教育を排除するのではなく、どのような教育を受けさせるかの教育選択権の行使が具体的問題となろう。国際連合で可決された世界人権宣言二十六条においては、子どもが無償の教育をうける権利を謳っているが、同時に第三項として「親は自分の子どもたちに与えらるべき教育の種類を選ぶ権利を優先的に持つ」と言っている。即ち、このような親の教育選択権とも言うべきものが十分に生かされてはじめて人権のみとめられた社会である。義務教育制の名のもとに社会の圧力によってこの選択権が否定されるのは民主的ではない。幸いに日本の幼稚園教育にはこの選択権が自由に行使できる。この意味で私立幼稚園の役割が大きいし、またそれぞれ明確な教育の原理や特徴を発揮していくべきである。このように幼稚園、保育所、家庭はそれぞれ独立性があり、それを尊重しながら、共存させていく必要がある。早急な一元化ほど危険な暴論はないであろう。



# 都市生活と幼児の健康教育



上 村 菊 朗

△ま え が き△

三才児の一斉健診が実施されている今日では、就学前二、三年にわたる幼稚園年令児が保健行政の面では最後まで取り残された存在となっている。この結果、この年令児の健康教育は幼稚園と家庭に全面的にまかされているといつてよい。さらに、後年まで持続する基本的な生活習慣が幼児期に主に形成される事を考えるとこの時期の健康教育は都会、農村の区別なく極めて重要である。

ただ、一様に健康教育が大切であるといっても、都会と農村ではその重点の置かれる部門が異なるのは当然の事といえよう。とくに都会には、心身両面から人々に障害を与えつつける都市外傷

作用のある事が近年強調されている。この外傷因子の種類は非常に多いが健康に直接関係のあるものだけをあげても、騒音、大気の汚染、過稠密人口、交通地獄などがすぐ頭に浮かんでくる。この影響は、急速な発育過程にあり、充分な抵抗力も乏しい幼児期にとくに大きいので、これらの都市外傷因子を頭におきながら都会の幼児の健康教育を考えてみたいと思う。なお、その順序は幼稚園教育要領に従って、保健衛生、体育、安全教育といった形で取りあげてみる。

## △都会の幼児の保健衛生△

皮膚や爪、歯など自分の身体或いは、食事、衣服、排泄に関連

して、清潔の基本的な生活習慣を身につける事は健康教育の第一歩である。さらに進んで、子どもが常にさらされている有害な外からの刺激にも堪えうる身体をこの年令で積極的につくりださなくてはならない。このような観点から、都会の幼児にとくに必要な事項を二、三取りあげてみたいと思う。

## 1 大気汚染に関連したもの

新鮮で澄んだ空気の不足は都市の公害の中でも最たるものといえる。とくに、大都市では冬季には、有毒ガスをさえ含んだスモッグにおおわれ、これが、慢性的の気管支炎や気管支喘息、気管支拡張症増加の原因とさえなっている。この対策として、食事で、帰宅時の手洗い、うがいなどの励行を指導するのは当然であるが、幼児や家族にも空気の汚れに関心を持たせる健康教育が必要となる。この意味で、子どもが自分たちで戸や窓をあけて部屋の換気をするといった習慣を育てあげなくてはならない。このような換気に対する関心は、アパートなど西洋建築のふえている都会でガス中毒など空気汚染による事故を防ぐ意味でも意義が大きい。さらに家庭に対する指導として、空気汚染の比較的少ない朝の散歩や深呼吸、日曜日の家族連れ郊外ピクニックも積極的にすすめてはならない。

## 2 感染予防

幼稚園がしばしば、はしか、水痘、耳下腺炎、風疹、インフル

エンザ、など小児急性感染症の媒介所となることは周知の事実である。免疫性の乏しい集団である以上、幼稚園でこれを完全に避けることは難しい。しかし、都会は密接な集団生活の場所であるため、これら感染症の流行する機会が極めて多く、それだけに家庭と密接に連絡を取った予防対策が必要である。このため、全園児について、過去におけるこれら小児感染性疾患への罹患の有無、予防接種のあるものについては（チフテリア、百日咳、結核、ポリオ、麻疹など）その最終実施時期について、資料をととのえておく必要がある。しかし、この点では現実には都会の幼稚園でもまだまだ不備のことが多い。

## 3 栄養からみた健康教育

都会の幼児には食欲不振、偏食、ムシ歯が目立って多い。これをみても食事指導が健康教育の重要な課題となることが解る。食欲不振の背景には子どもの生れつきの体格、或いは母親の目に余る食餌の強制など各種の因子が考えられるが、なかでも目立っているのが摂取される栄養素のアンバランスである。都会における今日の第一の問題としては、菓子類、とくに飴、チョコレートなど甘い菓子の氾らんである。これらは、濃縮型含水炭素食品といってもよく、急速に利用されるので、適切に与えれば、急性疲労の回復に役立つ利点はあるが、一面、甘い菓子のもつ少量で高カロリーといった特性から不規則にあたえたと、他の食品を取

る余裕、即ち食欲は抑えられてしまう。さらに、これらの糖分の分解過程では、多くのビタミンB<sub>1</sub>を必要とし、骨や歯からカルシウムを取り去ることも知られている。このような食生活におちいりやすい都会の子どもに栄養素のアンバランスから来る骨や筋肉のひよわさ、ムシ菌の多発がみられるのは必然的といってもよい。この意味で、幼稚園では集団で食事を取る機会を利用して、偏食を矯正する一方、家庭における規則正しい間食指導まで積極的に行なう必要がある。

#### 4 積極的、計画的なトレーニング

都会の子どもの健康を考える際、上記のような都市の持つ外傷作用をなるべく受けけないようにする消極的な対策とともに、これらの外傷因子を受けてもこれに抵抗力を持つ心身両面での健康体をつくりあげる積極的な手段とが常に考えられる。後者が、充分に幼児の発達を考慮した年令相応のトレーニングである。これは都会刺戟の侵襲に対して、幼児を守るため行なわれるもので、なかでも最近注目されるのが自律鍛練法である。はじめ、主として皮膚が弱い、かさをひきやすい、自家中市や、喘息、蕁麻疹といったアレルギー症状を起しやすいような過敏体質児の治療法として考案されたものであるが、すべての子どもの健康づくりにも役立つことはいふまでもない。これは文字通り、自律神経の安定を日ざした心身両面からのトレーニングということができる。

具体的には、皮膚や粘膜を通じて適度の刺戟を自律神経に与え、これに身体がなれることで、外的に与えられる各種の有害因子に対する抵抗力をもつくりだそうとするものである。刺戟としては、乾布摩擦、冷水摩擦、冷温浴、シャワー、さらに、薄着や就寝起床時の完全な着替えがあげられる。また、縄とび、体操などの適度の全身運動も毎日規則的に行なわれる。ただ、これらのトレーニングは、対象児の年令、体質を考え、漸進的に実施することはいふまでもない。

また、精神面では、きめた日課は必ず守り、規則正しい生活、自分の事は自分でするという日律性が要求される。

このような自律鍛練法とともに、都市のもつ公害に堪えるためには、戶外或いは室内での運動を通じてのトレーニングが重要となるのでこれについて次に述べる。

#### 〈都会の子どもの運動〉

幼児が身体的に非常に活動的であることは、成人に比べてその基礎代謝が目立って高いことから明らかである。したがって、運動に関する限りは周囲から特別な干渉や指導を行わずに自然の発達にまかせておいて差支えないはずである。しかし、都会の子どもは、この点で極めて不自然な環境におかれているというべ



きであろう。即ち、遊び場の不足、危険をおそれての周囲からの束縛などは、幼児の自然の欲求である身体的な活動を極端にまで制限しているのが現状である。したがって都会では、運動についても計画的な指導とトレーニングを受けることが幼児の健康教育の大きな課題とならざるを得ない。次に幼児期の運動について、一、二気づかれた点をあげてみたいと思う。

### 1 全身運動の機会をますこと

二、三才頃から幼児が必ず興味を持つ三輪車も、ブランコも、手足の協同運動を必要とする全身運動の一つである。また最近普及して来たバランス遊具も、平均感覚とともに全身運動を必要とするものの一つといえる。最近では家庭でも簡単にできるでんぐり返し、手押し車といった体育遊びも盛んに行なわれている。しかし、おとなの目からみればかなりと思われるこれらの運動も、田舎の子どもたちが束縛もなく大自然の中で走り廻り、とび、木に登り、川で泳いでいるのに比べると、その運動量ははるかに少ない。また、幼稚園児の相当数が家庭では室内での遊びに終始していることを考えると、都会の幼稚園教育では、運動のカリキュラムがいままで以上の比重を占める必要がある。時にはせまい幼稚園の園庭が幼児の唯一の安全な遊び場であることも考慮して、家庭と連絡を取りながら、保育時間前後の利用法も積極的に考えなくてはならない。

### 2 積極的な戸外運動

都会の子どもが保護されすぎる傾向にあることはたびたび指摘してきた通りである。このような特殊な家庭環境から、まず脱皮させ得る場所は幼稚園であるから、集団からかけ離れた生活習慣のあるものは、早くみつめて家庭とも連絡して矯正に当らなくてはならない。このうち、保健上、特に問題になるのは、陽に当らず顔色の悪い子、厚着の子ども、姿勢の悪い子ども、戸外運動を嫌う子どもなどである。

いずれにしても、都会の子どもに共通しているのが、戸外運動の不足であることを考え、冬季は、特に太陽光線を大切にした保育計画をたて、その日の気象条件に応じて戸外保育の(青空保育)機会をふやす必要がある。

### 〈安全 教育〉

最近の統計をみると、我が国でも一才から九才までの小児の死亡は、三人に一人が事故死である。さらに、五才から九才までの間では事故死に男女差が目立ち、男児では事故死と病死が相半ばするといった驚くべき数字となっている。これをみても幼児期の健康教育の一つとして、まず安全教育をあげなくてはならないことが解る。

事故の内容は三分の一が交通事故、それについて高所から墜落、火傷があげられているが、都会でとくに多いものが交通事故である。

## 1 交通事故への安全教育

交通事故に対しては、社会的関心も高まっており、地域別の集団登園、帰宅もよく指導されるようになってきている。しかし、大切な事は、横断歩道などを小す道路標識、交通信号に忠実に従い、さらに、路上でふざけたり、あわてたりしない歩行態度の養成である。このためには機会あることに実地教育を行なって行くほかはない。

## 2 事故耐性を養う

高所からの墜落、外傷といった事故を含めて、これらの事故を避ける能力、即ち事故耐性をつくりあけることも幼児期の健康教育として大切である。このためには、走る、とぶ、ころがる、とびおりるといった一般的な運動機能とともに、速く反応する、人や物をすばやくきける、すばやく方向をかえる、見通しをつけて次の動作ができるといった安全に必要な運動神経の発達をはからなくてはならない。このためには、バランス遊具を使う、或いはスプーリー感にならうためにホールを使った遊戯を積極的に行なうといった配慮がのぞましい。

## 3 危険な遊び、他人をきずつけることには厳格に

都会の安全教育で大切なことは、子どもの玩具にしばしば危険なものが登場することである。これにはテレビや映画の影響もあるので、子どもの間に流行している遊びに常に留意して本人や他人をきずつける玩具や遊び行動を発見したときは厳格に規制しなければならぬ。他人に迷惑をかける、危害を加えるといった行動は絶対に許されないことを幼児期から繰り返して教えて行くことも安全教育の大きな課題といえる。

## 結語

都会の幼児に必要な健康教育について、保健、運動、安全教育にわけて述べてみた。

これらの事柄はいずれも常識の範囲を出ないが、都会の持つ公害を最小限に抑え、また、幼児に積極的に外傷因子への耐性を持たせるためには、どうしても実行しなくてはならない事である。今回は主として、身体面についてのみ述べたが、心身相関の精神医学的な問題になると都市の傷害因子はさらに大きい。この事も考えに入れて進んで心身両面で都市生活へ適性と耐性を持つ幼児を育てあげなくてはならない。

(関東連信病院)

# 新しい幼児教育の実践

## 長等幼稚園プラン

朝、登園した子どもたちか、半日を幼稚園で過ごして、自分たちの力を出しきってあそび、みち足りた快い気持ちをもって家路につく姿をみることでできるとき、誰もが本当によかったなと思うであらう。子どもが幼稚園にきて、自分で何かをやったというを感じられるときには、そこで何かを学習しているのである。子どもは日々成長している。ということは一日の生活の中で、自分自身が動いて、活動している。自分が動いていないときには、その一日の子どもの成長は停滞していることになる。幼稚園の生活の中で、日々、子どもに成長してもらいたいし、もっともよく成長に役立つように心を砕き、実際に環境をつくってゆくことが、幼稚園教育の負っている課題である。

こんなことを考えながら、長等幼稚園の子どもたちのことを思い浮かべるとき、私は何か新鮮な息吹を感じざるを得ない。そこには、子どもの輝いた眼、真剣な生活態度がある。

外面的などころから言うならば、長等幼稚園では、クラスの壁をはずし、フロクラムの枠をはずしているという特長がある。すなわち、五つのクラスが組単位の活動をするのではなく、どの子どもも、どの部屋にても行ってもよいようになっている。各部屋は、それぞれ別の機能をもっており、ある部屋は粘土や製作材料があり、ある部屋は音楽リズム、ある部屋は絵をかく材料、また他の部屋は絵本をよむ部屋があって、とくに大きな部屋では大つみきや運動具、ままごとコーナーなどがある。プロクラムの面から言うならば、朝、登園してから帰るまでの間に、クラス単位で集まるのは、日のべんとうの時と、帰る前のクラスの話し合いの時だけである。子どもはどのように動いてもよいのである。ある人は、このような保育形態を解体保育というが、何たか妙な名前で、この名称から誤解されるむきがある。そこで重要なことは、そこには少なくとも、熱心に遊びととりくむ幼児の姿があることである。保育室の床・面にビニールをしきつめて、大きなかめからひとかかえも粘土をとり出して、床にたたきつけている子どもの姿に出会って、はっとさせられる。大きな木の根っこにベニヤ板やなにかを打ちつけて、高い台の上にのぼって釘をうっている姿も壮観である。しかし、私どもの現実には常に完全ということはない。いつも過程である。どんなところでも研究せねばならない課題をたくさんかかえている。ここでもまた、解決せねばならない課題がたくさんあるに違いない。私は、この幼稚園の姿もひとつの過程としてとらえたい。そしてこの段階で、その新しい動きを見たい。たたくことは、どこの幼稚園にも役に立つことと思う。



# 幼稚園 参観記



朝からあいにくと曇った天気である。八時五〇分に幼稚園に到着すると、もうすでに半数くらいの子どもが来ており、遊びはじめている子どももいたし、スモックに着かえている子どももあった。小学校の木造校舎と校庭をそっくりもらっているの、庭はひろびろとしている。校舎も古いけれども、ゆとりがある。かぎのてになつて、二つの教室と、三つの教室とが校庭に面しており、その他に、会集室と称して、かなり大きな遊戯室がある。ここでは、早くもふたつ三つのグループがままごとを始めている。また大つみきを動かしている子どもも数人ある。

クラスの数は五つだが、全部一年保育とのことである。

## 九時

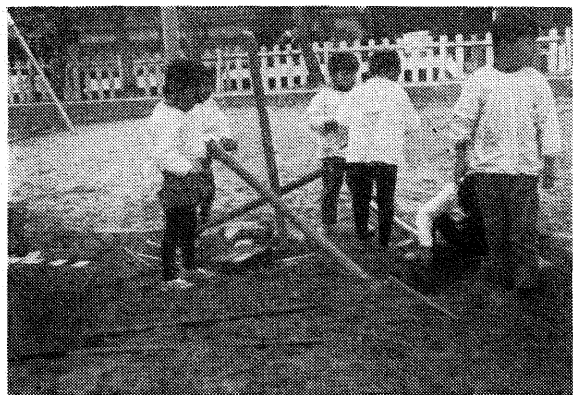
登園してくる子どもが、次次につづいているが、荷物を自分のへやにおいた子どもたちは、それぞれ何かしはじめのものが多く、会集室では、五人ほどの子どもが集つて先生に花をわけてもらっている。だれかが、家からままごと用に、生花をひとつかえもってきたらしい。じゃんけんして、好きな花を数本ずつもらつて、ままごとの場所をつくりはじめる。戸外では、先生が手伝つて、とび箱のような形をした大つみきを運び出している。これは、戸外用のつみきとして作らせたものだそうで、とび箱の中段のように、天井がぬいてある。数人でもたないと思へない。ひとつ運び出しては、またかけ出して、次のをとりにゆく。

ひとつの教室は、ビニールを床一面にしいてあり、大きなかめに粘土がはいって、二か所においてある。数人の子どもがねんどのまわりにいる。廊下のつきあたりが木工場になっており、木工台があり、昨日から作りかけの根つこが木工台の上にある。二、三人の子どもがそれをみている。

部屋を出たところに、水のはいつていないコンクリート水槽があり、女の子が二人、その中でろうせきをこすっている。

## 九時三〇分

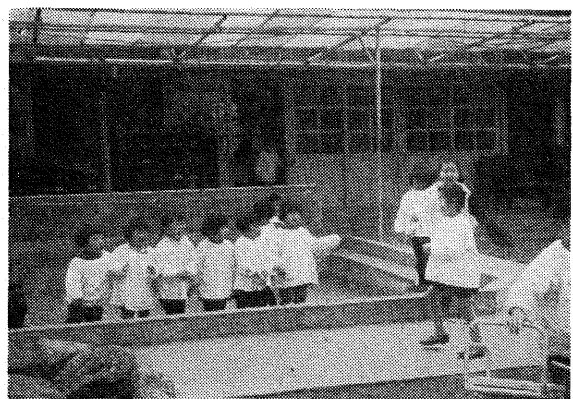
玄関わきに、古自動車の車のとれたのが二台、戸外においてある。男児が数人、自動車によじ登り、屋根の上からとびおる。それを何回もくりかえしている。アトム之歌を口ずさんでいる。

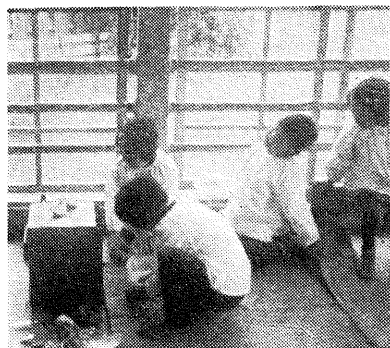


砂場に十人くらいはいっている。物置から、大きなベニヤ板のきりくずを出してくる。丸くきりぬいたものなどあり、木工工場からきり残しをもらってきたようなものである。ブロックをひとつずつころがしながら運んでいる子どもがいる。砂場に運びこんでいる。さっき出した大つみきの中にはいって遊んでいる子どもと、チャングルに上っている子どもがいる。校庭のまん中で、先生が木片で線をひいている。数人の子どもがまわりにきて、先生の手伝いをす

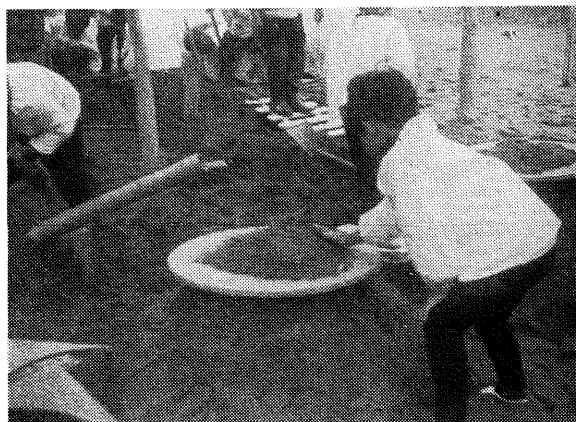


る。そこで先生を交えて、ドッチボールがはじまる。からの水槽の中では、十名くらいの女の子と男児が一名、七匹の子山羊と狼のうたをうたいながら、歌がきりになると、狼が山羊をおいかけて、おいかげごっこをしている。「オ母サンダヨッテ言ウンダヨ」「オ母サンダヨ」「ウソダヨ、ウソダヨ、狼ダ、オ母サンノ手ハモットモット白イ」ウワー

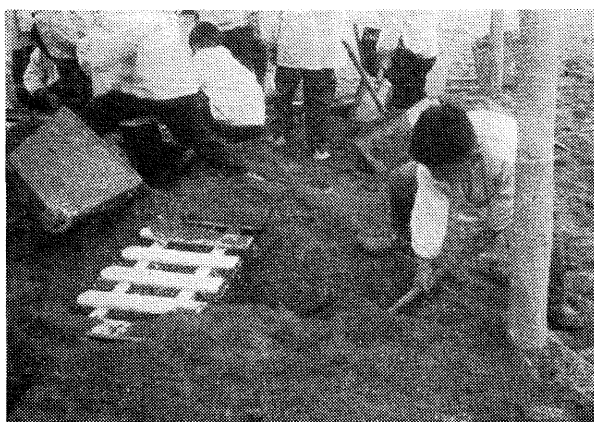




各部屋で相  
当活発に遊び  
がはじまっ  
ている。会  
集室には、ま  
まごとグル  
ープが六か  
所ある。  
ござだけし  
いて、切り  
刻ん



で、お皿に  
きれいに  
もりつけ  
ている  
もの。ほ  
んもの  
大根や人  
参、キャ  
ベツなど  
使ってい  
る。家か  
らもって  
くるのだ  
そう  
である。  
ついたて  
のかげの  
隅を利用  
している  
グループ  
など、そ  
れ六、七  
人がグル  
ープにな  
っている  
。滑り台  
の下では  
、魚つり  
ごっこを  
やっている  
子どもが  
、七、八  
人ある。  
ままごと  
は、先生  
が加わっ  
ているグ  
ループも  
ある。「ヨ  
ソノオウ  
チニイッ  
テキマス  
」と言っ  
て、別の  
グループ  
にいく子  
どももあ  
る。へや  
のすみの  
みかん箱  
をう





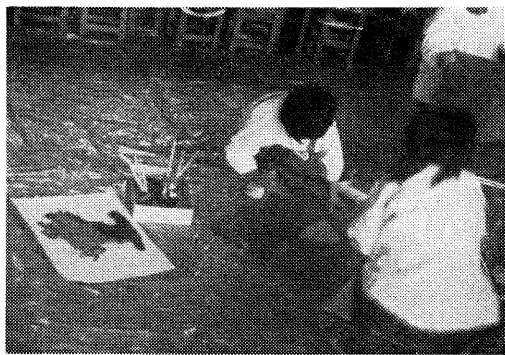
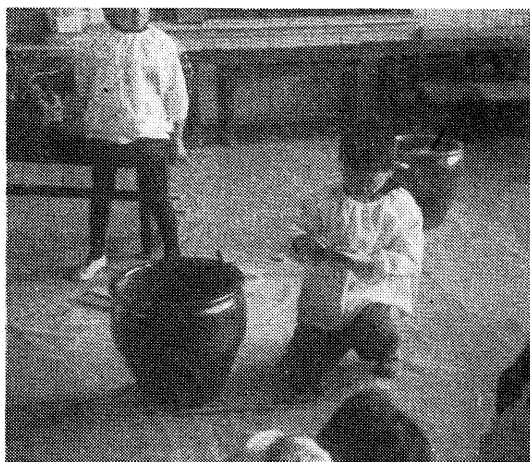


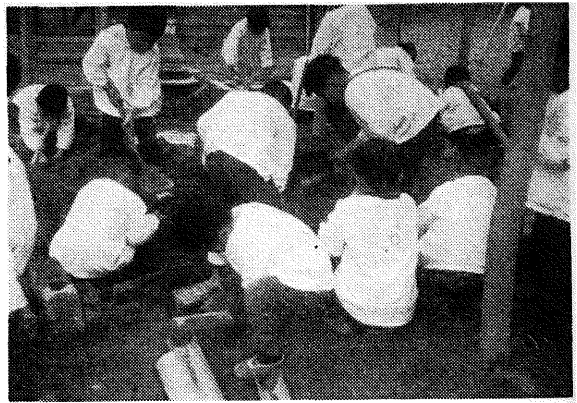
ちつけたようなおうちの中からも、二、三人の顔がのぞいている。砂場の中には、二十名くらいの男女児がはいっている。せん水かんだと言って、大砲がとりつけられる。戦車をつくっているものもある。二十名くらい、相互に連絡があるようだ。溝が縦横にでき、バケツで水を運んでいるものが数名いる。

七匹の小山羊ごっこは、汽車ごっこになり、十名くらい一列になって、前の子どもにつかまって走っている。

で余念のない子どもが数名、ねんどに、ビールビンのふた、ビニール線などがとりつけられている。ひとりずつが黙ってやっているものが多い。

毛系のくずの箱の傍では、人形をつくっている女の子





が数名いる。カメラをむけると、くると背中をむけてしまう。

牛乳のふたに、細い糸を通すことに一生けんめいになっている女の子が数名いる。首かざりを作っているらしい。

ねんどで腕わをつくっている女の子もいる。

木工のコーナーでは、十名くらいの男児が、それぞれ木を切ったり、打ちつけたりしている。木工台の上に乗って、木の根っこに、大きな丸いベニヤ板を、一人が支えて一人が打ちつけている。

一〇時三〇分

砂場はいよいよ活発になる。

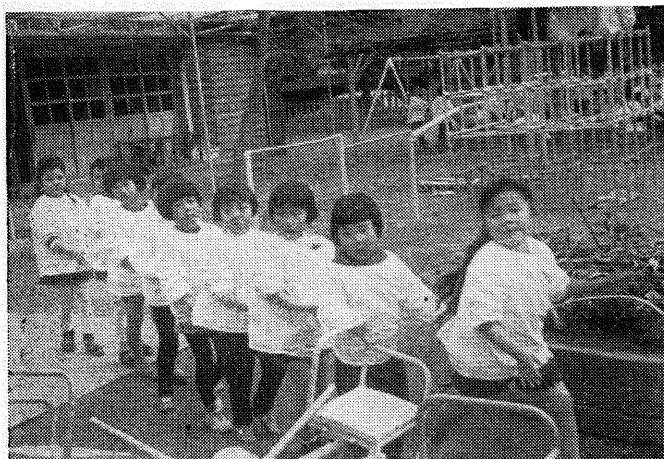
砂場の外にも、一面に砂がしいてある。砂場の外で、女の子が二人、水をくんできて砂いじりをはじめ。お互いに腕をまくり合っている。砂場の外に砂をもち出すことが合理的に許されているようだ。

七匹の小山羊のグループは汽車ごっこになったので、先生がレコードをかけてやると、リズムにのって動く。先生が少し手をいれて、切符うりば、駅などができる。「夢ノ特急デス」「大津エキデス」「ノセテクタサイ」など言っている。「キップクダサイ」「キップカナイ、お客サンガミンナモッテイッタ」など会話が交わされている。旗をもち出して、ふみきりもできる。汽車が何本もゆききし

ている。

リズムの部屋では、レコードが鳴って、十五人くらいの子どもたちが一列になって、曲の変化につれて、とんだり、歩いたりしている。

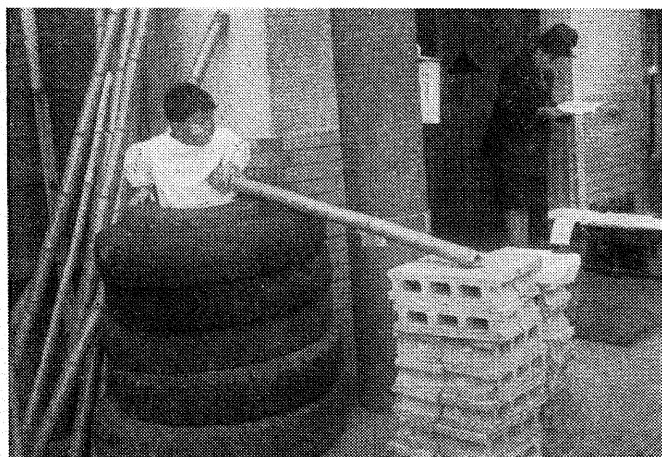
絵本のへやでは十名くらいが本をみており、ところどころで二、三名が会話をかわしながらみている。



粘土と製作の部屋ではあいかわらず、同じメンバーの子どもたちが、製作にとりくんでいる。

一一時一〇分 雨が降ってくる。

戸外のグループではそれぞれの場所がかたづけはじめ。戸外の大つきは、先生と一しよに、大勢ではこぼ。ひとりで動かそうとして苦労し、そのうちに友だちや先生が手伝いにくるものもある。



長い棒を二人でかついでしまうものもある。砂場の木片は物置へ、ブロックはひとつひとつころがしながらもとの場所へ、全員がよく動いてかたづけていた。

全員が室内にはいったころ、おべんとうのしたくになった。



食事がすむ

と、また、それぞれの遊びにすぐにもどってゆき、一時ころになつて遊びをやめて片づけるのが残念であつた。

今日は雨が降つたきたので、使うのをみられなかったが、裏庭には、大きな酒樽を横にして、ままごこのうちが作つてあり、また、モー

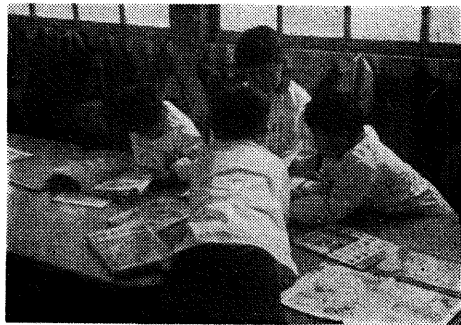
ターボートの古いのを備えてあった。室内の壁には、古い電話器がいくつもとりつけてあった。これは利用率が高いそうである。いろいろの材料を豊富に用意してあり、それだからこそ、このように遊びが展開できるのだと思つた。

一クラス約四十人であるから、幼稚園全体では二百人近い子どもがいるはずであるが、騒音や混雑がみられないのも

おどろいた。周開が広いせいであろう。園長先生のおはなしによれば、この幼稚園は一見無秩序のようだが、子どもたちは、今日は何をしようとはりきつてやってきて、目標がはっきりしているから、内面的な秩序があるとのことであつた。なるほどと思つた。

また、製作をする子どもも、砂遊びをする子どもも、自分で心に画いたものを最後までつくることができ、途中で止めて集りなさいといわれることがない。だから、安心して、身を打ちこんでつくつていられる、その姿は印象的であつた。

しかも、ある期間をとれば、子どもたちは偏りなく、多くの経験をしているということも、もっともうなずけた。



(M)

# 『あそび』の指導 の 実践的研究

長等幼稚園

一、「自由あそび」と呼ばれる活動についての研究を行なった動機について

私たちは約四年前「自由あそび」という活動について研究をすすめるようになりました。その理由は、それまでのクラスがあまりにも組織意識が強く、けんかが多く、幼児の安定した姿が見られなかったからです。ある内容について保育していても早くあそびたい、早くすましたい気持が強く、「自由あそび」の時間には、ちょっとさわったといつてはたたき、泣きわめき、ほおきを持って組同志のけ

んかをするようなしまつてした。このような状態が目につき心に感じ、なんとかして幼児本来の姿にとりもどしたいという願いから、どこに原因があるのか考えてみました。地域の状態、指導の方法、内容それに形態、生活環境などから保育の中で追求していきましました。幼児は楽しくあそべなければならぬ、そのあそびの基盤となる教材が乏しいのではないだろうか、とも考えました。だがそれには経済的なものがないです。そこで、教師の考案したものとともに、家庭で必要としない廃品（素材）をもらって置くことにしました。古い自動車、モーターボート、酒のしこみだる、小さいものはマッチ箱から糸まきのような素材をあたえることにしたのです。それらに接する幼児たちの姿を見てみると、いきいきと本当に楽しそうでありました。ちょうどこうした問題をもっている時、市教育委員会から設定保育とよばれている活動と、「自由あそび」とよばれていた活動のあり方について研究会がもたれることになり、私たちはそのことについて考える機会を与えられました。この「自由あそび」的なふんいきの中で望ましい経験の指導ができないものか、つまり「自由あそびの活動」をうまく指導してみればどのような反応があるだろうか、と考へ、研究指定園として研究をすすめることになったのでした。研究してみると、従来やってきた「自由あそび」とはちがってなかなかむずかしく、一時は思いあまって中止してしまおうかとさえ考えました。しかし、問題があるからこそ研究するのだとの教えにはげまされ、ようやく考え方が明確になってきたように思っています。まだ全体としてまとまりも未熟ですが、ここに研究の一端を報告することにいたします。

## 二、長等幼稚園プランの構成の考え方

当園の指導計画は季節や行事によって立案しておりません。また幼児は虫がたいへん好きで興味があるからといって、そのまま主題や単元に虫をとりあげみんなの幼児に一齐に指導しようとする方法でもありません。またみんながいっしょに話を聞いたり話し合ったりすることができなければかたよりができるのも思っておりません。二、三学期ともなればグループのまとまりが目立ってきて、この遊びがよく見られます。しかし、幼児の表面的な姿だけ見てこ

う遊びを立案したものでもないのです。私たちは幼児が生活において求めているものは何か、あそびの中の何に興味や関心があるのかなどをよく理解した上で保育の場を構成することがたいせつだと思っています。「めんこあそび」をしている幼児に例をとってみると、「めんこあそび」が好きだと簡単に解釈しないで、その「めんこあそび」の何が、どこがおもしろく興味があるのかということをよく理解してやることがたいせつだと思っています。一つのあそびにおいても、その幼児の求める気持や興味のあり方はさまざまであり、そのことは多種多様なあそびの中で、幼児の考え方、感じ方、

11・12	1	(36年度分) 2・3
○友達と一緒にかたづけられたか	○友達と一緒にかたづけられたか	
○集団の中で自信のある態度であそんだか		
○辛抱強く最後までできたか ○うち込んで仕事できたか	○辛抱強く最後までできたか ○ものを注意して見たり聞いたりすることができたか	○自分で選んだことを最後までやりとげたか
	○何でも進んで表現できたか ○人の為になることが進んでできたか	○何でも進んで発表できたか
○自分の意見をはっきりいったり人の意見をきいたりしてあそんだか ○友達がまちがったことをしていたら教えてあげることができたか ○友達同志できめたルールを守ってあそべたか ○集団の一員としてスムーズに交わりあそべたか ○当番の責任がはたせたか	○友達に迷惑をかけたらずぐあやまったか ○グループの一員としてあそびの持続が共にできたか ○友達同志お互いに相談し合っていたか ○親切にしてもらった時、感謝の気持をもったか	○みとめ合いながらあそんだか ○友達が困っていたら助けてあげることができたか ○友達がほめられたら共に喜んであげられるか
○考えたことや感じたことを思う存分表現できたか ○自然の移り代りに関心を持っているか	○自分の思ったこと感じたことを思う存分表現できたか ○新しい絵や音楽に興味を持っているか ○新しいことをしようとしているか	
	○寒さに負けず元気にあそんだか	

る項目にあげることにした。

表 1 目 標 分 析 表

大 項 目		4	5	6・7	9・10
自	○園生活の基礎的な習慣に馴れたか	○自分の身のまわりのものを自分で処理できたか ○友達と登園することができたか	○後片付けができたか	○個人的な生活のきまりが守れたか ○いろいろなきまりのうち幼児の守れないものだけをあげる ○後片付けができたか	○後片付けができたか
	○いろいろな材料や遊具を使ってあそんだか	○遊具を粗末にしないか ○遊具を使ってあそんだか ○決められた場所に始末できたか ○困った時など泣かず先生に話すことができたか ○自分のものと友達のものとの区別ができたか	○ものを大事につかったか	○簡単な目的をもったあそびができたか ○あそびの道具を大切に使ったか	○自分から自主的にあそびにとりくむことができたか
	○興味をもってしたか			○興味を持ってあそんだか ○いろいろな材料にじめたか ○最後まで興味をもってしたか	○最後まで興味をもってしたか ○幼稚園の行事に楽しく参加できたか
発	○自分から進んでできたか		○自分のことは自分でする		○進んでお手伝いができたか
社	○友だちと一緒にあそべたか	○友達と一緒にあそべたか ○順番に代り合ってあそべたか	○遊具その他の材料をゆずり合ってあそんだか ○友達と共同してあそんだか	○友達に迷惑をかけずにあそんだか ○材料や遊具をゆずり合ってあそんだか ○話し合いながらあそんだか ○あそびの仲間入りができたか ○友だちがあやまちをした時はゆるしてあげることができたか	○友達にめいわくのかからないようにあそべたか ○話し合いながらあそんだか ○協同してあそべたか ○きまりを守ってあそんだか ○役割を代り合ってできたか ○自分の責任がはたせたか
創	○簡単な内容をもったあそびが工夫できたか ○ものの美しさを素直に感じることができたか		○いろいろな材料を使ってあそんだか ○身近な動植物に関心をもちいじめたりしなかったか	○簡単な目的や内容を持ったあそびができたか ○材料や遊具をいじったか ○自分の考えたこと感じたことをしてあそんだか	○自然の移り代りに関心をもっているか ○いろいろな材料や遊具を工夫して使ったか ○自分で考えたことや感じたことが表現できたか
健	○自分の身の廻りの健康生活に関心を持っているか	○怪我をしたら薬をつけてもらう ○用便を済ませた後やあそんだ後に手を洗うか	○食事のいろいろの習慣を知ったか ○きまりよく検査を受けたか	○危険な所へ行かなかったか	○危険なあそびをしなかったか ○自分の身の廻り手足汗等の清潔に気をつけたことができたか
	○身近な交通道徳が守られたか ○元氣よく力一杯あそんだか	○右側を歩いたか	○皆と一緒に右側を上手に歩いたか	○信号を見て通ったか	○乗りものの乗り降りは順序よくできたか ○みんなと一緒に元氣よくあそんだか
子どものあそびの内容が未分化であるため評価項目もおおのずとからみ合ってくるから、一応ウエートをおいてい					



見方がことなるからであるといえるでしょう。だから幼児ののぞみやうったえを感じとり理解した上で、幼児に対して適切な指導の配慮を考えて指導計画を立案しているようにしています。指導計画だけ立派なものであっても幼児の成長発達にそぐわぬものであつてはなりません。また幼児の姿にそぐわぬ計画であるとわかれれば、あっさりとして去ることをおしまないこともたいせつです。それはあくまでも幼児を主体的に考えて立案しているからです。

### 三、評価 ―― あそびにかたよりができないか ――

私どもは、このような遊びの指導によって、子どもがどのような目標を身につけているかを知らうとしました。教師の指導のあり方を反省するのにも、評価はきわめて重要であります。

従来は、評価規準として教育要領に示されている経験内容のひとつひとつを問題にしていきましたが、この研究を進めるに従つて、一年保育五才児としての成熟した人格の上に、総合的に考えるようになります。物や人に、とりくんでいく生活態度の育成を目標と考えるようになります。

具体的にあげてみますと、

○物や人に主体的に働きかけていく自主的な態度。

○あそび（仕事）を実現していく創造的な態度。

○友だちと仲よくあそびを發展させていく協同的な態度。

○生命を維持増進させていく健康な態度 であります。

前に述べましたように、当園のカリキュラムは、幼児の成長課題と教師の教育的立場から意図するものとを調和させて、期間目標を

たて、それを具体化した、いくつかの具体目標をあげていますが、そのねらいの根本がこの四項目であります。それを各月別に示したのが表1です。この表は、

(1) 四項目の目標を評価の大項目としてとりあげました。

(2) この大きな評価項目の中から、やや具体化された項目を便宜上、月別にあげました。

(3) 同じ項目の中で時期的に幼児の発達がみられ、質的に同じであつても、ねらいがやや高度となり変わってきます。その同質と思われるものをこのように区切つてかきました。

(4) 子どものあそびの内容が未分化であるため、評価項目もおのずとからみ合つてくるので、おもな項目だけあげました。

評価は、子どもたちがこれらの目標が達成できたかどうかということを経験が知るための手段であり、言いかえますと、教師自身の評価であるにすぎません。

さて、実際には、幼児をどのようにみて、どのように評価しているかについて言いますと、幼児たちの個々を具体的にみて理解するように、いつ、どこで、どんなあそびを誰としていたか、をホケットに入れているメモ帳に走り書きしておきます。一方幼児たちがクラス別に集つた帰宅前に、今日一日、どんなあそびを誰と、どこでしていたかを個々の幼児から聞きます。そして明日へのあそびの意欲をもつてくれるように話し合います。

さて幼児たちが降園した後、記録したメモ帳を整理して、各分担の場の幼児一人ひとりの実態を皆で話しあいます。また、帰宅前に、幼児から聞いた事を含め合わせて、実態をノートに記してお

表 2 9 月中における個人のあそびの経験表

普 曜 日	番 号	男 71	72	73	74	75	76	女 96	97	98	99	100	101
5	水	楽	角	積	え	角	ケ	ク	え	え	え	ク	え
6	木	え・積	走・ク	ケ		積・や	集	お・ケ	ク・製	ク・製	え・製	ク・製	オ・え
8	土	ゲ	野	ケ	集	野	楽	楽・お	楽・マ	楽・マ	楽・ゲ	マ・オ	楽・マ
10	月	汽・傍	集	砂	ま	固・砂	え	黒・え	ク・ま	集	え	え	え
14	金	楽・ケ	磁・や	磁・や	磁・組	楽・ゲ	楽・ゲ	楽	ま	楽	楽	ま	楽
17	月	製	角	製	角	木	お	ゲ	オ・リ	オ	え・ク	き	固・リ
18	火	磁・や	楽・リ	え	楽・ゲ	楽・集	楽・ゲ	ま	製	楽	製	ま	え
20	木	製	え	製	ゲ	木	マ・製	黒・ま	紙	色	製・固	色	製・固
22	土	木	積・ゲ	玉・黒	玉	玉・砂	指	玉・色	話	製	製・玉	ク・製	製
24	月	製・ゲ		固・砂	飛・ゲ	砂・ボ	リ・粘	玉	製	玉	製		製
26	水	楽・リ	え	え・砂	固・ゲ	基・ゲ	楽・リ	ま	製		製	え	ま
28	金	楽・ゲ	野	積	砂・集	積・集	砂・集	え	え	ク	砂		固・楽

楽=楽器あそび

製=製作（主にひん紙類使  
用）

え=絵具で描く

積=積木

ゲ=ゲーム（しょうぎ等）

汽=汽車ごっこ

傍=傍観

砂=砂であそぶ

飛=飛行機あそび

固=固定遊具（ぶらんこ、  
鉄棒など）

ま=ままごと

色=色木あそび

集=集団で自分たちでルー  
ルをきめてあそぶ（戦  
争ごっこ、警官ごっこ

など）

お=おにごっこ

虫=虫とり

木=木工

リ=リズム遊戲

黒=黒板にえをかく

ク=クレパス画

角=すもうあそび

読=絵本

字=字をかく

オ=オルガンをひく  
き=きり紙、はり紙

玉=玉つなぎ

平=平均台

野=野球

図=図鑑をみる

ブ=目的なくぶらぶら

磁=磁石あそび

や=やじろべえつくり

走=はしり競走

鳥=小鳥をみる

マ=マジック画

組=組木

電=電話あそび

彫=木版はり

紙=紙芝居

花=草花つみ

指=指人形つくり

玉=しゃぼん玉

話=紙芝居を発表

ボ=ボールあそび

墓=虫の墓つくり

＼=欠席

きます。  
このようにして評価をしますと、子どもを理解することによって適切な指導がなされるのであり、また子どもを理解することによって評価ができるわけで、この三つはともに切りはなせない密接な関係にあって、私たちの指導の重要性を再度痛感いたします。

次に、このような当園の教育目標や評価や方法などが、独自のものであるために、子どもの活動内容にかたよりがなかったかということを中心し、実際の子どもたちの活動の面と教育要領にあがっている経験内容との比較参照によってみました。「指導にかたよりがなく」ということを中心として教育要領にあげられている基準内容を一つひとつおさえようとする人もあるでしょう。けれども私たちは、幼児のあそびの内容に「かたより」がないかということを考える前に、活動内容を円満に経験していこうとする構え方に「かたより」が見られないかという見方をしています。自由あそびだから、好きなあそびだけをしておればよいのではありません。いろいろな活動内容がスムーズにできる子どもであってほしいと望んでいるわけです。実際の子どもたちの動きから整理したものが表2です。

この表では、十二日間の活動内容を個々の子どもについてあげてみましたところ、実際の経験のかたよりは少数の子どもを除いてはなかったという事実を認めました。そしてこの少数の子どもは、やはり生活態度全体の上にかたよりのある子どもであることがわかり、これらの子どもに、より気をくばり指導していくよう努めています。また、教育要領と比較してみても、少数を除いた子どもたちは、示されている経験内容の他に、もっと豊富な活動をしていることがわかり、評価から得た力強さを感じました。

次に、目標について教育要領と照らし合わせてみましたところ、いい表わし方こそちがうけれども、人間形成の基盤となるものをねらうところが全く同じであることをたしかめることができました。以上、評価についてみてきましたが、要は子どもの望ましい成長

のための評価であり、正しい評価をおこなうには、子どもをよく理解することが最も重要であるということを知りました。「指導するが如く、しないが如く」と言われるように、陰に陽に教師が動くことによって、幼児たちがのびのびと自由な雰囲気の中で自己を実現し、さらに他と協同していくことができるよう、のびていってほしいものであります。

#### 四、環境構成の新しい意味

幼児のあそびが人間形成の上からみて非常にたいせつな意義をもっていることは、先ほどから説明されましたが、そのあそびを上手に育てる大きな役割を持っているものが環境であることは今さら申すまでもありません。

幼児たちの課題をみたとしてやるには、興味の中心がどこにあるのか、さらにそれをどのように指導していけばよいかということを、環境面からも十分考慮しなければならぬと思います。

環境の問題については、環境をよくすれば、幼児はよくなるという環境の側からの考え方と、もう一つは、主体の側からとりあげる考え方、すなわち環境を自分のものにしていく子どもの観点からも考えるのでは、根本的に違った意味を持つことを考えねばなりません。私たちの環境に対するところみの中でも、この二つの側面からこころみて、実践研究をしてきました。その過程をありのまま、順を追ってのべてみたいと思います。

(一) 幼児たちの興味の中心に即した主な教材を、固定した保育室に準備した場合

つまり六領域の内容を予測して教師が意図的に各部屋や園庭に教材を設定することあります。例えば、絵画の部屋、音楽リズムの部屋などがあり、幼児たちは、自分のしようとするあそびの場へ自由に行き、その環境の中で教材を自由に使って活動します。

はつきりと自分の目的をもってあそんだ事例の中の一例をあげてみますと、

幼児たちは園庭において、とってきた木の実や木の葉であそんでいる。たりないから採りに行こうという話がまとまり、希望者だけが行くことになった。「あんた、どんぐりひろいに行くか」「わたしいかへんわ、どんぐりの大きいのとって来てね」というように、以前のような組意識が全然なく、いろんな幼児と自由にあそぶので経験が豊富になり、一つのものに打ちこむ態度ができてきました。が、反面、自分の部屋にとじこもってしまう欠点があります。

#### (二) 各保育室別に環境構成をした場合

各部屋に教材を固定しておく、自分の部屋や居心地のよい場所ばかりにいて、あそびに発展性がなく、情性におちいりやすいように思われます。そこで、各クラスにいろいろな教材を総合的に置いて、クラス単位の自由あそびの指導にしてみました。

いろいろな空箱をおいてあるのをみつけた幼児たちは、友だちのと同じものを自分のものにし、並べたり、つくったりしている。教師も中へ入りこんで助言したり手伝ったりしていると、消極的な幼児も、自分の部屋なので、安定してやっている。材料が手近にあることはたいせつであるが、その反面、自分の目的が安易になりやすい、定まった友だちであるため視野がせまく、あそびに深まりがな

く、また教材が豊富にないことも問題になってきました。

#### (三) 幼児たちの活動に必要なものを、保育室に固定しないで置いた場合

さきに申しましたように、六領域の環境設定ではなく、教師が幼児の興味の中心を深く洞察して、例えばタンボールのような大きな箱の部屋、大積木の部屋、絵画の部屋などの場を設定する。時には、製作的な内容の場を主に設定することもあり、またゲームあそびの場を設定することもあります。自分の部屋ばかりにいる幼児にも教材を移動させて刺激を与えるために、一週間ぐらいで教材を別の保育室に移動させて、教師の分担も代ることにしました。

以上三段階に分けて設定してきましたが、幼児がもっと、主体的にとりこむ態度の必要性を感じました。

#### (四) 自発性と創造性を育てることを明確にして、三箇所にも総合的な材料をおいた場合

このことについては、教材をこちらが意図的に置くのではなく、幼児の動きをみて、興味を持ちそうな教材を三箇所に集中して用意することにした。

片隅におかれた素材をさわって、三人の男児が話し合っている。「いろんな色のボタンがあるね」「この箱でロボットつくろうか」「ほくこれで写真機つくるわ」「この赤い紙はとカラー写真みたいや」「先生、ロボットつくるし、大きな箱とボール紙切りおくれ」などと要求し、主体的な行動が現われてきました。幼児の活動する範囲が自から広がり、それにしたがって、人や物に対する感じ方や見方、考え方についても以前とずいぶん異なっています。

表 3 幼児の主体的な創造性によって環境を広く利用して活動が展開された事例 1 月 20 日(土)雨

環 境	幼 児 の 活 動	教 師 の 配 慮
園全体	(45)「火事でここが焼けているから逃げ て下さい」	
各保育室	と野球のバットを勇ましい顔つきでホ ースの筒口として先頭にもち、その後 には汽車ごっこのロープを長く持て てホースとして、園長の仕事中の部屋へ 4、5人がどやどやと入って来る。	
会集室	(74)「園長先生ここが火事ですだから逃げ て下さい」	
野球のバット	(145)「打架、打架」 と大声できけふと急に4、5人が走っ ていく。	⑦「やけどをしましたか から逃げられませ ん」
汽車ごっこの 輪	(151)(146)(78)(5)(106)(141)の6人が 板積木を持って走って来る。 園長はそれに乗せられた、ワッショイ ワッショイと会集室の一隅で、くり広 げられている(131)(132)(85)のグルー プのままごとの場に行き。	○板積木にまたがり歩 いて行く。
ままご道具具	(141)「火事でやけどをしましたから頼 みます。」	
大積木	(131)「私とお医者さんと違いやす。 あちの家へ行って下さい。」ともう一 隅のグループ(158)(125)(160)(133)の ままごとの場を教える。 そのグループの所へ行く。	
	(158)「火事で火傷をしましたから、な おしてあげて下さい」	
	(158)「はいはい」とすぐ園長の手をす てままごと道具具を利用して注射をす る。	
	(125)「はい、綱帯もまきましよう」と 布切れを窓で来る。ままごとを中断 して手当をしている。	
	○一方消防士たち(145)(15)(146)(114) (150)は消火に走って行く。	⑧ありがとうございました。 もう歩けるよ うになりました。
	(145)「隣へ火が移りました。早く隣へ 行って水をかけて下さい」と走って消 火に行く。それを聞いて、(107)(147) (49)(44)が「ウーウーウー」といいな がら各保育室を走り廻っている。	○大きなグループで、 大きなスケールでい ろいろな表現あそび がやっていたことを 知る。 ○一定のグループばか りによらず、その場 その場に集まった新 しいグループの中 においても勇気を持 つて。 ○自分で選んだあそび を最後までやりとげ る。

(4) 幼児が主体的にとりくめるような環境構成をした場合  
教師が意図的に環境設定をするのではなく、さきの例のように、  
幼児の主体的な行動をみて、幼稚園全体を幼児たちが自由に広く利  
用できるように準備しました。いつでも必要な時に使用できるように、  
教材のおいてある場所を教え、自由に出して使用してよいこと  
を約束し、整理、整頓がしつかりできるように配慮しました。

幼児の主體的な創造性によって、環境を広く利用して活動が展開された事例を表3にあげてみます。

## 五、教材の再発見と指導の

こころみ

“自由あそび”といっても、子どもたちのやりたいまま自由に手放してしまつては、放任の姿だと言われるでしょう。私たちは常に幼児のあそびの中に入って幼児の心

を十分理解し、それに合った適切な指導を与えながら遊びを豊かに伸ばしてやることを怠らないように努めてまいりました。

「あそびの指導」について私たちがいろいろ学びました事を、指導のころみと、新しい教材の再発見の二つの点にしまつて述べたいと思います。

#### (1) あそびでの方向づけ

七月四日 雨上りの朝の混雑した廊下でこのような事例にぶつかりました。

「先生、廊下通せんぼして通してくれはらへんわ」女児三人が職員室へいいつけにまいりました。そのわけを聞いてみますと、お金を持って来ないと通してやらないと言っているらしいのです。その現場へ案内されてみると、四、五人の活動的な男児が、廊下の曲り角に鉄製はしこを横にして通せんぼをしています。何とかよいあそびへ方向づける必要があると思つた私は、「お金を持ってきたら通してくれはるのやね」と尋ねてみました。男児は「そうや、そうや——」と答えましたので、まわりの子どもたちに「お金を作ろうか」と話しかけてお金づくりへ働きかけてみましたところ、案外おもしろく有料道路がくりひろげられました。

目的のない衝動的なあそびや思いつきで、意味のないように見えるあそびでも、教師の働きかけによって遊びの手口をみつれたり、よいあそびへのきっかけを引き出すことができ、おもしろく展開していくものです。

#### (2) 幼児の目あての明確化と教師の援助

次に、幼児のめあての明確化と教師の援助について述べたいと思

います。

三学期がはじまつてF子はこんなあそびをはじめました。

お正月にみたのでしうか、煙草の空箱を二つ折りにして獅子を作りました。いろいろ工夫してでき上つた獅子を指にはめ、歌をうたいながら部屋の中を歩きまわっています。私は、せっかくこんなにして自分の作つた獅子で遊んでいるのだから、無理のないようにもう少し発展しないものだろうかと考えました。そこで

「お獅子ごつこしうか。けど、大きいとほんとうの獅子まいのおじさんみたくかぶれるし、もっともつとおもしろいだろうね」と助言してみますと、「そうやな、明日もつと大きいを作るわ」と意気込んで言いました。

翌日から二日ばかりでお獅子づくりをしているうちに、友たちのお獅子もできました。

職員室のおほらいをしたお獅子は、太鼓や鈴などに合わせておどり出し、おどりがすむと、「お金ください。なかつたら何でも結構です」とおぼんを出して牛乳のふたをもらって行きます。公集室のピアノを弾いてやると、たくさんのお獅子は曲のリズムに合わせて獅子まいをはじめました。大せいの子どもたちが集つてきてそれを始しそうにみえています。子どもたちは目新しいものにとひつき、何かして遊ほうとしますが、そのあそびの深まりには限度があり、自己満足している状態が多く見られます。そのあそびをより上げ発展させていくには、私たち教師が子どもたちのあそびの中に入り、よい相談相手となつて解決の足がかりを見つけてやったり、また援助役になつて自主的、創造的な構え方を励ましてやることになりたい

であると思います。

### (3) 幼児の感受性と教師の受容

指導のころみの三つめには、幼児の感受性と教師の受容について述べたいと思います。

十月七日 月曜日の朝、幼児たちにとっては大きな発見でした。九月二十一日に皇子山球場で掘ってきた観察箱の中の虫がたくさん死んでいるのです。大ぜい集って淋しそうな顔を並べています。その中の一人が「先生、お墓したたらあかんか」と言いだしました。私も子どもたちの思うようにお墓つくりに加わることにしました。男女十四人によって大きな穴が掘られ、お墓の上には私も手伝って重いおもり三角石が置かれ、そのまわりには美しい石が並べられました。園庭のまわりで花を摘む女兒、ままごとのお茶碗でお水が供えられたり、虫のおはかと書いた墓標までできてきました。翌朝、三人の女兒がお墓の前でこんな話し合いをしていました。「虫さんにお水あげようか」「お花もかえたげようさ」「こんなやさしい心遣いには心をうたれました」。

生きものの死んだのを見ますとたいいていの子どもはすぐお墓を作ろうとしますが、一時的な感情による経験が多いように思います。しかし、この虫のお墓をとりまく子どもたちは、その虫に強く愛着を感じていたのか、みんなが力を合わせて美しいお墓を作りあげ、いつまでも世話を続けるなど、たいへん温いものを感じました。

自由な雰囲気の中で幼児たちは生きいきと遊んでいます。しかしその中には、元氣ばかりで粗暴な子ども、ものの美しさを楽しさ、また、あわれみなどが感じられない子ども、友だちのあやまちを素

直に許さない子どもなど、感受性に乏しい姿も見られます。いろいろのあそびや友だちとの交わりを通して温いふくらみのある人格形成をしてゆきたいと思います。幼児の心をじゅうぶん理解し、それに合った適切な指導を与えながら、あそびを豊かに伸ばしてやるためには、今述べましたように、方向づけしてやること、あそびが発展するよう援助役になってやること、それから、幼児を理解し感情を受容してやることの三つが必要であると思います。従来の教育の中で、感情の受容については非常に欠けていると思いますが、私たちは幼児を理解していく上にたいへん重要な問題だと思いますので、もっともっと研究を深めていきたいと考えています。

### (4) 新しい教材の発見

子どもたちのあそびの指導のころみについていろいろ検討してありますうちに、新しい教材を発見することができました。

六月十三日 四、五日降り続いた雨のためにフカフカになった園庭で泥んこあそびがはじまりました。「ぼくもさしてや」「わたしもませて」と大ぜい集って来ました。私は、こんなところにも教材があるのだと思いました。

先生、川作ろうと思うのやけど、いっしょに作らへんか」私はみんなに誘いかけてみました。「ワァー しようしよう」叱られないだろうかと心配そうな表情で水たまりに入っていた男児も、喜んで加わってきました。四十人あまりの子どもたちの中には、水の流れについての話し合いが生まれたり、ベチャヘチャとフィンガーペインテンクなどのあそびもはじまりました。

自由にのびのびと遊んでいる子どもたちは、思わぬものに興味を



もち、思わぬところからあそびを見出していくものです。今まで何ら価値のないようなものとして捨て去られていたものの中に、子どもたちの感動するものがあるのではないかと思います。

## 六、こっこ遊び

幼児たちは幼稚園生活の中でいろいろのあそびを経験しています。絵をかく、物を作ってみる、鉄棒やシーソーなどをする、歌う、おどる、友だちとあそぶ、話し合う、本をみる、などと言ったようなことを自分で選び、自分たちで友だちを作っているいろいろと展開しています。その多くのあそびの中から、「こっこあそび」というものに目を向けてみました。

四月入園間もなくから卒園の時まで、年間、毎日のようにくりひろげられるものの一つとして、先ずまごことあそびが上ってきました。この種のアソビは、入園して来る前から、家庭において大なり小なりの展開がなされていることも非常に多いと思います。姉さんたちにいれてもらって赤ちゃん扱いにされていたことや、また、小さいながらにお母さんのまねごとをやっていたことなど、このまごことあそびは時にはお家こっこに、またお客さんこっこ、売り屋さんこっこ、食堂こっこなどと、いろいろな名前をつけて展開しております。そうして、こうして遊ぶ子どもたちは、知らず知らずのうちに社会性を身につけ、固定した小グループのあそびに終らず、大ぜいで遊ぶ楽しみを知り、互いに成長の道をたどっていくのです。

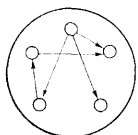
### ○入園当初

入園して幼稚園という新しい環境の中で、家庭と異なりました。

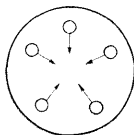
と道具をみた幼児は、それらの道具に目を見張り、「使ってもいいのかな？」「使ってみたいなあ」そして道具を出してみる。知っている友だちといっしょにその場にひろげていじってみたり、それから並べたりして遊びました。

こうして五月ともなりますと、二・四人ぐらいの知っている友だちといっしょにまごことをするのに、自分たちで適当だと思った場所を選び、（例えば電話のある所がいいな、電話を使って遊べるからなど）道具やごぎを手伝い合いながら運んで行ってごぎを敷き、その上にひろげてはじまります。こっこあそびはしていても、各個々に自分の思ったように道具をひろげたり、また中には、ただそのグループにいるというだけで別にこれということもせず、じっと坐っているだけのものもあります。「図1」のように、人に働きかけるとか話し合うということがほとんどないような型でした。

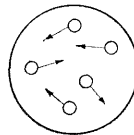
五月中旬頃には次のような傾向がどの場にも現われていました。四・五人の集りで、おかあさんになろうと思うと、自分はおかあさんになると言い、また別の子どもも「私もおかあさん」と言う。こうして二人も三人もおかあさんと名のつても、別に誰も否定もせず、ただ自分の思ったままに名のり、また、



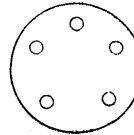
(図4)



(図3)

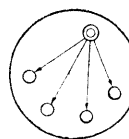


(図2)

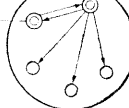


(図1)

五図のイ



五図のロ



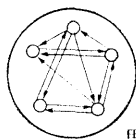
(図5)

「ごちそうを切ることに大部分の子どもが興味をもって、そのグループの五人のうち四人までがござの上で好きな方を向いて、包丁できむこと」に余念がない。あとの

TO-

一人は、一人なりに道具を並べて遊んでいるといったように(図2)自分のしたいことを思い思いにしながら遊んでいました。このよ

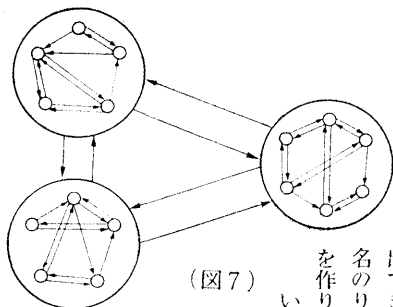
(図6)



うなやり方から、六月に入った頃には「図3」のような型が現われてきました。

先の例では、一グループにおかあさんが何人ようと平気でいたものが、今度は一グループにおかあさんは一人といった意識が少し出てきたらしく、例えば一人おかあさんをお名り、もう一人が包丁を使って「ごちそうを作りたいから、私もおかあさんになりた

(図7)



いと言いだしたので、一審先におかあさん役をすると言った子どもは、「そんなら、お姉さんもごちそうつくり、ちょっとしたるよしい……」ということ、あとから言いだしたものは、おねえさん役でおさまったというように、自分がしたい仕事のできる役になろうとい

うように変わってきました。

このようにして、六月も半ばを過ぎた頃には、自分自分では何かに話しかけているようにしゃべっているが、自分の話し相手も、きめているような、いないような、そしてまた、その自分の話しかけに対して返答を求めもせず、互いに言いっぱなしといった型の会話をまじえながら、個々の思うように遊んでいました。

四〜五人の知った友だちと寄って遊んでいても、互に並行あそびの段階でした。(図4)

しかしその後、七月を迎える頃には、その一つひとつのグループの中には、リーダー的な子どもが力を伸ばしかけてきて、そのリーダーの思いのままにグループの中の役づけをはじめました。そのグループのリーダー以外のものが言いなりに動くときは、「図5(イ)」のように、いかにもスムーズにことが運んでいるようにみえているが、一方そのリーダーに対等する子どもがいる時には、そこに役の取り合いや言い合いがおこり、教師に告げにくることがでてきました。(図5(ロ))

そこで教師が中に入り、二人の言い分の通るような線を出すように助言してやることによって、あそびはすすむようになりました。

(図6の方の側の子どもが必ずしもリーダーの言うことに納得しているものばかりとは限らず、きつとこの中には、「こうしたいけれども……あれがしたいなあ」と思いながらも、よく言いださずに、自分をおさえながらそのグループの仲間入りをしていることもあるように思います。

こうして、リーダーの思いにより進められていたあそびも、一学

期を終る頃にはグループの中では互に話し合いながら「図6」のあそびを展開するようになりました。

そして夏休みも過ぎ、すっかり幼稚園になれ、幼稚園生活にとけこんできた十、十一月頃になると、こっこあそびもますます人数を増し、一グループ内の話し合いや行動に終ることなく、「図7」のように、グループ同志が互に話しかけたり、お客さんと呼ばれたり、他のあそびのグループと関係したりして、グループ相互の交流もどんどんできるようになりました。

以上、こっこあそびの中における人と人とのつながり方について述べてきましたが、幼児たちはこのような対人関係をもちながら、いろいろな環境を利用し、場を構成したり、いろいろな内容をもったこっこあそびを展開していくのです。こうしたあそびの中で幼児たちは自然のうちに、多くの仲間と交わり、いろいろな経験をいろいろな形でこころみ、自己主張はかりではこっこあそびの仲間入りはむずかしいことを知ったり、徐々に相手の気持を知ることになり、幼児は幼児相互によって話し合い、理解し合って、互いに成長発達していくのだということを学ぶことができました。

以上、いろいろと述べてまいりましたが、ここにもう一度まとめてみます。

“あそびの指導について”

先ず評価の点から申しますと、

子どもを評価するのは望ましい成長をはかるためであり、正しい評価を行なうには、子どもをよく理解することが最も重要であると

いうことを痛感したわけがあります。

次に環境の面から申しますと、

今後は、こうしたあそびの指導において環境が単なる環境としてではなく、そこにいる幼児たちの動きにそくした、環境という主体との関係において考慮され、追求していかなければならないと思います。

それから次に、あそびの指導として必要であると思われることについては次の三つを挙げてみました。

一つは、あそびの方向づけをしてやること。次には、あそびが展開するように援助役になってやること。三つめには、幼児を理解し、感情を受容してやることです。

その中でも、感情の受容という問題は、子どもを理解していくうえに非常に重要な問題であり、まだまだ研究を深めてゆきたいといえます。自然のあそびの中に新しい教材を発見することができたり、子どもたちから教えられるものです。これからもその態度で教材の研究を進めてゆきたいと思っています。

そして最後に、社会性という面につきましても、やはり、よく幼児を理解し、常に幼児の動きを通して、その感じ方、見方、考え方についてよく観察し、幼児たちが力いっぱい展開できるように気を配り、時には、幼児と同じ立場になって仲間入りをしたり、よき相談役となつてやるような教師の姿勢がとくに必要であるということなどを学ぶことができたと思っております。

まだまだ不十分なものがかりですが、皆様方の御指導と御批判をいただければ幸いと存じます。

(滋賀県大津市立長等幼稚園)

# 長等幼稚園プラン

をめぐって

司会者

今日はこういう新しい保育のやり方について、みなさん、疑問や質問があると思いますから、それを一つじかにぶつけていただきたいと思います。私、司会役をつとめさせていただきますから、どうぞ遠慮なくお話ください。

今日午前中ごらんになったかたが、ここにたくさんおられることと想像いたしますが……。ここでちょっと午前中を復習してみますと、こののへやにはままごとが幾つもありまして、ここで二人ぐらいままごとをやっている、ピアノのかけでままごとをやっている、ここらへんでもやっている

て、このへやの中で三カ所か四カ所ままごとをやっている、このへやの中はあのスベリタイの下でお魚釣りみたいなのをやっている、組木をやっている子がいて、それからこのすぐ向かいのへやでもやつぱりままごとをやっている、あそこのへやだけでも三カ所か四カ所ありました。

向かいのへやのあそこのミカン箱みたいなものを打ちつけた中で、ゴショゴショとだれかが何かしていましたね。数人の子どもが……。

こちらのへやへ来ると、床に一面ビニールが敷いてあって、そこでえのぐで絵をか

いている。そこに先生が一人おられる。そのお隣りのへやではやっぱり床に一面ビニールが敷いてあって、そしてあそこでは粘土の幾つものグループがあつて……、今日の保育については、みなさんごらんになったように（参観記参照）、ここでは一日中あそびを中心にした保育をしておられる。お昼のおべんとうのときと、帰るときとに集まるだけです。それからクラスごとに集まらないで、子どもたちはどのへやに行ってもいいようになっています。そして各へや

長等幼稚園職員一同

大津市教育委員会 河辺 泉

参 会 者 約二〇〇名

司会者 津 守 真

昭和38年12月9日

は、粘土のへや、絵のへや、音楽のへや、本のへや、何でもできる大きなへや、というように、一応分かれています。では、どうぞ、どなたからでもお話ください

質問① 長等幼稚園では自由保育をしていらっしゃるって聞きましたが、寄せていたくことがないので、一ぺんどんなにやっていたらっしゃるのか、不安なような、楽しみのような気持ちで、六時起きしてやって来たのです。今までわたくしの思っていたような長等幼稚園でなく、子どもさんたちが活発に経験していなさるのに、ほんとに驚きました。それで、入園当時はどんなだったか、入園当時からやっぱりこういうふうにやってきなさったのだろうかをうかがいたいと思います

司会者 今のご質問は、今ぱっと見ると非常に活発に動いているので、たいへん予想外なのに驚いた、こんなに活発にするには、いったいどういう指導をすればよいのか、入園当初からいったいどんなになつて行くのだろうか、まあこういうご質問のようですが、どうぞどなたか一つ……。

## 当園

やはり家庭から初めて大きな集団に入ってきて、当園で言う成長体系の第一の「よりどころを求めている」ことを幼児が満足するようにして行きたいと思います。幼稚園のあるがままの環境におく、という程度のことから始めまして、常に子どもを見ていて、子どもたちの移り変ってきたその状態をとらえて、私たちの意図するものに調和させて行く、というふうに行っています。じつは、その間に、教師間で職員会議をもちます。初めは、こちらの三組だけはお便所を教えて、向うの二組はお便所を教えないで、向うの二組は、こちらのお便所を教えて、「先生お便所はどこや」と聞いたときに、初めて「ここですよ」と教えて行こう、ということにしたので、ところが、子どもがいつしうけんめいに遊んでいるのに、その組だけ呼び入れて、特別に「ここは何ですよ」と教えることの必要性がないのではないか、と思うようになりました。それで、全部のクラスにお便所を教えないことにしたので、それでも少しも困ったことにはなりません。また、鼻をかんだ

紙を持って、先生これどこへ捨てるのにと、わざわざ廊下から下靴をはいて教師のところに尋ねたことを覚えていのです。それでよろしゅうございますでしょうか

## 司会者

一番最初からクラスということはそれほどこきり分けなくて、今のようになさるわけですか。

## 当園

あの初めわね、組を分けますのにだいたい生年月日順に分けますのです。以前各町内単位で分けておりました。ともかく、一番最初が家庭とそう変わりないようなふんいにして、先生は子どもといつも遊ぶようにしています。幼稚園へ来たら、先生に教えてもらいにくる所だ、という意識が家庭にあるわけなんです。ですから、子どもは幼稚園へ来たら、何か教えられるのではないかと心配し、もし、むずかしかったら、どうしようか、という不安があるわけです。けれども、いつまでたっても先生は教えてくれるという様子もない。そうすると、親について来てもらって、不安な子どもが、だんだんう帰ってくれてもよいわ。幼稚園はむずかしいとこやし、ほ

んでもう帰ってくれてもよい」と言うようになりすす。そういうようにして、子ども

同志が、幼稚園はこわくないところ、なにも先生から教えられて、むずかしいことをするところじゃない、家とちよつとも変わりになしで、家よりもつとおもちゃがたくさんあり、友たちがたくさんあつて、楽しい所だという気持を、徐々に持つようになりすす。心から、自然に安定するようになってきて、その中で、子ども自身の安定感ができ、いろんな活動をやるうとする意気込みがわいてくるわけです。それで、子ども自身に聞いてみても、「あんたはきよう返つてきてもらわなかつたのね」「フン、幼稚園は何もせんてよいとこやさかいに、もういらん」と言つて自身がそう言つています。そういう気持を充分自分たちで味わたつた上で、初めて子どもが、「さうやろうか、むずかしくない、何でもやつてよい」という心かまえて、幼稚園は自分らで好きなことがやれるんだ」という気持になります。そういうことがずつと身についていきますから、現在でも、何でもやれるん

たという気持で、自分らで、結局遊びをみつけて、やつております。

質問② お便所などは、初めに教えておく組と、教えなかつた組があるとおつしやいましたかその場合、とういうところに差違が見られましたか。

当園 まゝ、たゞ差違は見られませんでした。

どうしても便所に行かなければならない必要性のあるときには、先生に「お便所どこ」と聞きにまいますし、また、お友たちに、「教えたげよう」と言っている子どももありす。それで、四月入園当初からおしつこをたれる子どもはありませんでした。

質問③ クラスの解体は、朝登園してまいりましてから、帰るまで、さうしておられま

すか。  
当園 その通りです。ても幼稚園には行事がございますしね。また、教師の意図があつた場合には全部集めて幻燈をするなり、そしてまた、園全体の行事として誕生会をするなり、さういふときはございます。また、帰る前にはクラス別にまとまつて歌を

うたつたり、その日の反省を開いたり、促してやつたり、あしたのお話し合ひをした

り、それから、お話なんかを聞かしてやることもあるとか、日によつて違ひますが、このさうな扱い方です。

質問④ 自由遊びと單元活動との関連について、さういふふうにお考へになつてゐるのですか。

当園 さうです。ね。單元活動といふのは、いわゆる教師が意図的にもつた指導のことを考へておられるのですか。

質問④ わたくしどもは、單元活動で「木の葉、木の葉」といふさうな單元をきめております。けれども、遊びの状態は、きよう見せていたたいさうに、主として、グループでいろいろと子どもが遊びます。

当園 子どもに何かをもう一つ深めたいといふ意味で、單元保育をなさるわけですね。子どもの姿からでてきたものを、もう一ぺんそれを幼児全体にさせてやりたいと思ひ、させてほしくない子どもがあつてもさせてやりたいと思つて、教師の意図でおやりになるわけですわね。わたくしたちは

教師の意図というよりも、子どもを主体にして、子どもが遊ぶということを大切にしたり扱っております。その子どもの生活の中で、子どもがそれぞれする活動に、こちらが援助することが主になります。改めて子どもにこれをしなさい、これが適当だから、こういうものが成長するのだからへんプラスになるからという考えてやっておりません。たとえば、この虫の成長が子どもたちに科学的に理科的に大切なから知らなければ一年生に成長して行けないのたという考えは、わたくしたちはもっていないわけです。人間として成長していく上の一歩基盤となる一つの生活態度が欠けていないだろうか、ということの方がわたくしたちは重大に考えております。

中途はんばで出ていった子どもには「あなたこれでできたの、おしまい？」と聞いてみて、子どもがおしまいと言った場合には、それを認めてやらなければなりません。教師はそれができていないと思ってしまう、子どもはそれができていると思ってしまうかもしれないのです。で、「これでおし

まいなの」ときいてやったときには「はいこれでできたんだ」と言えば「できたんだ」だったらいいわね」と言いますが、それをこちらが「いいやいやできていない」ところはこういうようにしたらどうた」とか「このところに、こういうふうにもっていったらよいのだ」というのは言ひすぎだと思います。これは教師の考えで、子ども自身はそれで満足してできたのだという考えをもっていればよいのです。結局一人の子どもの内面的なものは、こちらの考えている以上の何か違ったものをもっているんじゃないかと思ひます。それをこちらが見抜かないで、たまたまこちらの言いたいことだけのことを言う、子どもが自分を出す機会がないわけですね。そのような機会なしに成長させていったときには、自分というものを生かさないで、人の言うことばかりに従って、何か悪いことをするという内面的な子どもになってしまふのじゃないでしょうか、わたくしどもは、子どもの活動自体を認めてやるというふうにやっておりますので、いわゆる単元保育とか、計画保育的

なことは第二段階に考えています。それが必要とみなしたときには、はっきり指導してやる。あなた、ここへ来てこれやりなさい」というふうには、家でしょっちゅう言われている子どもには自分でできない子どももありまうから、その子どもにはその子どもなりに、この子は家で人に言われなければできない子どもだ、じゃ一べんつれて来て「これやってみてごらん」と与えたときに、始めて「やろうか」という子どももあります。たからいつも子どもを見ていないと、十羽一からけの同じようなわけにはいきません。きょう見ていただいて落度があったかもわかりませんが、われわれも人間でございいますので、日々きばってやっていることが、少しでもプラスになったろうと思つて、まあいっしょうけんめいやっているわけです。

質問⑤ 園児が一年間しか幼稚園に來ない場合、十一月なら十一月に、十二月なら十二月でないといけない経験というものがあろと思ひます。その十一月でしかできない子どもの経験を、やはり単元活動でもつてい



って遊びの中からそれを経験させてあげた  
いという意図のもとに目標をたてることに  
必要だと思いますが

**当園** その十・月ごろに、彼らが経験できな  
いたろうというふうに先生たちが予定し、  
想像していらいっしやるものはどういうもの  
ですか。

**質問⑥** クラスを解体しておられて、そして  
子ども自身がしたいことを全部していく場  
合にどうしても、子どもに指導しておくか  
ばならない一面がぬけないでしょうか。そ  
れとも一人ひとりを十分に見ていけば、今  
体に一度に徹底しないでも何の心配もない  
ものでしょうか。たとえば手を洗うとか、  
集会なんかした場合にはしんぼうするとか、  
順番にお話をするとか。

**当園** じつは一斉にしていらいっしやったら、  
どの子にも全部に身につくかとおうかがい  
しようかと思っただけです。

もちろん教師の数にも限度があります  
が、初めの間はトイレまでついて行ってお  
りまして、そして終るまで見とどけて帰っ  
たりとか、そこでしに來た子どもにもこう

いうふうにするんやわと言って、そのつど  
そのつどお話をしているとか、まあそうい  
うふうなやり方でやってきておりますけれ  
ど

**司会者** とうもありがとうございます。た  
いへんにいいお話を聞かせていただきました  
た。今すこし皆さんで、そここにばつぽ  
つお話のでてきましたことを、どんなお話  
か、ご意見を、どうぞこちらへお聞かせ  
下さい。

**質問⑦** 子どもがいろいろの面で気になるよ  
うなことをよくすることがあるのですが、  
そうした場合には、あの子はこうだからあ  
すはこの点に気をつけようとかを、子ども  
が帰った後で思ったりいたします。個人の  
子どもとの精神的な結びつきは、どのよう  
にしてつけるのでしょうか。

**当園** こうして、それぞれのいろいろなそ  
びの場にわかれておりますと、自分の組の  
子どもが、いちいちどこでどう遊んでいた  
かは見られないわけなんです。そこで子ど  
もの帰りました後、自分の責任のあったあ  
そび場について話し合うわけです。背中の

番号によって入園当初はあまり名前の知ら  
ない子どもも、その番号でおぼえるわけ  
です。何番の子は、きょうはこういう遊びを  
していたとか、いろんな性格的な問題だと  
か、遊びの態度とか、内容を持ち場の責任  
をもって話し合うわけです。それを聞いた  
担任がクラスの記録簿にメモしていきま  
す。すると自分のクラスの子どもがきょう  
一日たいいどんなことをしていたかつか  
めるわけです。子どもたちもその日帰りま  
す前には、きょうどんなふうにお遊びして  
いたとか、どんなことを考えたとか、いろ  
いろな話し合いをするわけです。遊びの持  
ち場は、一週間から二週間かわります。  
と申しますのは、その先生の個人の指導が  
あまり出ないようにするためです。持ち場  
をかわると、次にひきつぎたいようなもの  
がありましたら次の持ち場の先生にくわし  
く申し送りをするわけです。ほかに親から  
の連絡があった場合には、きょうその子ど  
もの行った場では、一応その子どもについ  
て気をつけていたかどうか、急な場合で  
したら朝短時間にでも打ち合わせを、時に

応じてやっております。

**質問⑧** 今言われた子どもについての先生の報告会は、毎日やっておられるのですか。

**当園** できる限り毎日やるようにつとめております。

**質問⑧** それは時間的にはどれくらいなんですか。

**当園** 子どもたちが帰りまして、おべんとう持ちでない日は、午後わりに時間がもてますけれど、おべんとうのありますときは、二時過ぎぐらいになり、それから各室のそうじをして三時ごろになります。あまり長くしておりますとあくる日の保育の準備にさしつかえますので、平均一時間くらいでやっております。

**質問⑧** だいたいまあ一時間くらいでこの報告ができるわけですか。

**当園** あの、初めはなれませんが相当時間をくうわけなんですけれども、だいたいの要領がわかってきますと、ある程度大事な事は話し合えるように思っております。

**質問⑧** それをノートに記録される先生の努力はたいへんだらうと思います

**当園** 先生が、何番と何番とがこういうふう

にしていた、ここの所でこのような物を持って来て何をしていた、そして何番が出て来てそれを取り上げてしまったと、そしてそれはその子が泣いてしまったてどうのこうのと言われる事を、内容的に先生が記録するわけです。まあたいへんでございます。

**質問⑧** あの、ついですが、子どもの背中に番号がついておりますが、子ども同志はその番号で呼びあうわけなんですか

**当園** いえ、名前を呼びます。わたくしなんか全体の子どもが埋解できないでいますと、先生はく一〇三番で何々や、とちゃんと番号を言って来られます。で、スモックなんかで、このスモックだれのやろと云うと、先生何番、それはだれたれのやわ、とよその番号まで覚えているわけです。

**質問⑧** だいたい一年間で一八〇名の子どもの名前をだいたい覚えられるわけですか。

**当園** まあ覚えられますかね 教師はたいたい後から番号を見ながら名前を見て記録し

ます 遠方の方へずーと走って行っても、後から記録がずーととれますんです。よくよきさんには、大きな番号をつけて、と笑われておりますけれど、入園のとき初めにホンと子どもにはあれをつけます

**当園** それから、先程質問になった、教師と子どもとのつながりについてもう少し付け加えさせていただきますと、ほとくの先生はたれであるとか、何組の先生はたれであるということはよく知っていますが、全体の先生、つまりおとなの先生全部が自分たちの先生であるというふうに思っていると思うのです。なぜかと申しますと、保育の形態が入園当初から解体ですし、子どもは毎日自分のやりたい遊びの場へ行くわけです。その場、その場にそれぞれ教師がいまして、子どもたちはその場の先生に困っていることや受ねたいことなど、何を話してもよくなるように聞いてもらえるものですから、子どもたちは違う組の先生だということ意識も何もなしに話しかけます。そして、幼稚園の先生はみんな自分のことを聞いてトさる先生だ、私の先生だというふうな気

持をもっていますことには、間違いないと思いますけれど。園長であると申しまして、ちょっとも園長と思わないで、先生先生とへやの中へ用事を言いつけに來ますし、すぐとんで行つてやれる状態でありますから、すぐ走つて行つてやりますと、子どもは安心して遊びを続けます。ともかく、幼稚園の先生はみんな自分の先生であるという意識、だれに頼んでもかまわないというような氣持で最初からおりますのです。入園しまして、初めから組の意識をもたさないように教師自身がそのような態度で接しておりますので、どんな困ったことや悲しいことがあつても、訴えに來ますし、われわれも共に泣いてやることもあります。

**司会者** またいろいろおありだと思いますが、たんたん夕方になつて涼しいのが通り越して、わたくしもきょうここにおうかがいしてまた新たにいろいろなことを学びました。なまの野菜を使つてほうちょうで切つてありますが、都立で東京でこんななま野菜を使つたら教材費がかさんでしやうが

ないのですが……笑……そしてうかがつたら、みんなこれは子どもがうちからぶらさけて持つて來たんだそうです。自分で持つてこられたという話なんかうかがつて、いいなと思いました。わたくしはこの幼稚園に三年ほど前にうかがいまして、たいへん感心したのですが、ここで組の壁をこわしてやつていらつしやる、これをまあ、よく「解体」と言つたりするのですが、わたくし自身「解体」するとかしないとか、そういったこと自体にはあまり大きな関心がありません。それよりむしろ、子どもがどれだけそこで真剣に動いているか、子ども自身がどれだけ目に光をもつて動いているか、それが非常に大きな関心です。きょうここに入つてまいりまして、こんなに大ぜい來てもいっしょうけんめいやつている子どもは、夢中になつてこつちなんか見やしないですしね、写真なんかとつていてもたれも見向きもしやしない。みんないっしょうけんめいその場でもつて遊んでいる。それだけの真剣さを見ました。こういうことが小学校にいくとたんたん子どもの姿が見

えなくなつてしまつて、教科と先生の姿だけしか見えなくなつてしまいます。だから小学校に見に行くのはあまりおもしろくないのです。

こちらで小学校の校長先生に一言、きょうのこととでなにかお話をうかがつてみたいと思います。

#### 小学校長

大事なことは子どもたちの感情をいかに受容しておられるかということ、これがなんといつても一番大きな問題であると思う。今もお話がありましたように、「解体」するとか「一斉」にするとかいうような問題ではないのでありまして、子どもたちの一人ひとりの感情をうまく受容してやるのが重要なのであります。そのうらをかえせば、子どもたちのほんとうの自発的な意欲というものを非常にうまくリートして盛り上げているとわたくしは思うさきほど、先生と子どもとの関係ということとを問題にしておられましたが、今までのように教師が教室の中で大きくクローズアップされるのではなくて、教師の存在は小さい存在ながらはつきりしてあるけれど

も、教室いっぱいの子と私たちかクローズアップされるという形態がわたくしとしては望ましいものと思います

きょうお聞きしておりました中で、十分されておったと思っております。

それから同時に、そういうことをやるには、学校でもよく自発的な学習ということをやめるのですが、その場合にやっぱりよく、やりよいのは、たとえば国語の自発的な学習をさせるんだといって、国語の学習の順序をこっそり子どもに教える、本を読んだり、すしをひいたり……ところがこれは問題であると思うのです

ここのやり方の場合でたとえば、使所かここであるというふうにいちいち教えて、ばつと手離すのではなく、最初から手離してしまつて受容している、これも進歩的な学校ではやってゐるようですか、こんなやり方でないと思ふことはないのではないかと、思う。そういうことを思ひきつておやりになつていらっしゃるといふことは、進歩的なやり方ではないかと思つております。それと同時にそれをやるについては、子ども

というものをしっかりとつかめておられなければならぬ。それからここでは非常によくつかんでおられます。じつは、わたくしも十年前前に五年程かかつて、一年から六年までの子どもの研究と取り組んだことがあるんです

きょう当園の二発表の中に事例が出ておりましたが、あの「とおせんぼ」のお話が出ておりましたが、あの「とおせんぼ」がすくにああいうような指導の方向にもつていけるような措置というものは、やっぱりふたん先生が子どもを、握つていなければできない。今子どもはいつたい、何を要求しているのか、あるいは今という構え方でやっていくんかということ、即座に判断できねばならない。そしてワツと怒るんではなく、しばらく引き下がつて今この子はいつたい何を望んでいるかと、時間の余裕、空間の余裕がおけるような指導をしていなければならぬ

うちの子どもはこういうものである、こんなことをやっているが、これはたぶんこんなつもりでやっているのであつて、こう

いうようにしてやれば、こんなに伸びるのたという遠い先のことまで、つかんでおられなければ、この形態は非常に危険性があると思うのです。うまくやつてはるな」と

簡単にまねかてきないものと、わたくしは思います。それで一斉にやるか、やらなにかというお話がありましたが、わたくしは結局子どもの側に自発的にやれるところの受け入れ体制ができていくかいないかという問題を解決してかからなければならぬ。そのためには教師が受け入れ体制ができていくかどうか判断ができるということがたいせつである。そうしたことができておらないとやっていくからというだけでは、非常に危険性がある。わたくしも、も一つ自発的な学習と言いますけれども、ほんとうの自発的な学習とは、最近わたくしたちはきひしい教育と言ふのです。きひしい教育とは、頭をなぐる教育ではないのです。生活の対象とにかく真剣に取り組んでいるということである。ここにある学校の特長教育で、ある学級を見に行つたのですが、これは中学校の子どもですが、じつ

にな剣真そしてふんい気では非常にやわらかなものですが、その子どもたちはものすごい目つきでやっております。さつき「ままごと」の話がありました、それは甘い「ままごと」ではなく真剣にやっているのです。そのきびしさをもつと教育の面にあげられてこなければならぬ。そういうことは小学校でもやられますけれども、やっぱり、時間的な制約がありますので、ほんとうに子どもが自分の意志でやるという場が与えられない。幼稚園ではそれができる。こういう自由遊びの保育指導なら、自由にそれができると思う

わたしは親に言うのですけれども、子どもたち一人ひとりに少なくとも一日に十分か十五分、ほんとうに 真剣にもの事に打ち込める時間、場所が与えられないものだろうかと思うのです。数学や国語をやっておりますもやっぱり、これはも一つ教室があるとか、時間がきめられるとか、先生がいるとかいうようなことで、ほんとうに自分が打ち込んでいることができない。しかし、遊びの世界ではこれができるわけ

ある。そういうことが小学校ではむづかしい。ところが、幼稚園では現在おやりになっておられるということは、非常に理想的な形態だとわたくしは思うわけです。それとも一つなんといいますか、真剣さ、きびしさの教育を、わたしたちひよつとすると

はき違えるのです。それから一つ、感情を受容するということについて基本的には先程おっしゃったが、子どもの成長を期待する、成長の可能性ということを通じてやるということ、これなくしては、わたしたちは教育することはいできない。ことにこの教育はできないものだと思う

小学校の方におきましても、こういう形でやられた子どもが幼稚園から小学校へ来た場合は、これはすばらしいものができるとはいいないかと思えます。先程質問がありました国語や数学の面におけるところの能力差というものが考えられますけれども、それはわたしは許容できるものであると思います。そうでなくても個人差というものがあるわけですから、われわれ、こういう

ような保育でやっていかれた幼稚園の、その上に小学校がどんなふうに通っていくかということが、大きな課題であると思います。今までは、どこの幼稚園も小学校も、ばらばらになってましてお互いが悪口を言いあっているという、こころへんにちよつと問題があると思うのです。だからもう少し小学校の先生が幼稚園の先生を理解し、幼稚園の先生は小学校の教育を理解して、その上に立っていくならば、その断層がなくなるのじゃないかと思うわけです。この上に、たてられていくところの真の生活態度の問題が考えられていくならば、きつとすばらしい教育の実を結ぶものと思えます

**司会者** どうもありがとうございます。この幼稚園の上に今度、小学校の教員がほんとうに続いて下されれば、たいへんいいと思うんですが……。きょうあそこでビニールを床に全部敷いてね、そこでえのくをやったり ねんどうをやっている。だからねんどだつて、かっとたたきつけている子もいました。ああいうことが思いきってなされる

ように、床にまで全部ヒールを敷くくらい、そのくらいのことをお考えになったことが貴重だと思います。それから普通は自由遊びといっても東京あたりで見てみても、自由遊びの時間だけの遊びです。そのあとにはたいがい十時頃で打ちきって今度はまた何か別のことを、いわゆる単元遊びみたいなことをやるわけです。すると、その時はもう子どもたちは、つまらなくなってしまうので十分か十五分すると先生も続かなくなってしまう。また自由遊びにするんです。けれども、その自由遊びは元の自由遊びにつながらないで、元よりもっと低調なことになってしまったりする。まあ、それがね普通の型なんです。が思いきって朝来てから帰るまでとぎれないで遊びをやっておられる。これは自由遊びというよりも、まあむしろ、生命全体の遊びですね。それだけの思いきったことをなさったということ、それがじつに、ここの教育の大きなさ、さえになっているし、それだから、その勇氣をもって今度は組を解体なさったと、そういうふうに理解できるでしょう。皆さん

もぜひどうか自分のできる範囲での思いきった改革をなさることをおすすめてほしいです。ここの幼稚園でそれだけ思いきったことをするには、やはり理解とそれだけの働きがなくてはできない。わたしは、河辺先生がその大きな指導力、陰の指導力を持っているなと思います。そこで、河辺先生に最後に一言お願いします。

河辺 わたくしは、日頃この幼稚園に寄せていただいて、子どもとじかに接触するということ、を、何より楽しみにしております。ある日、砂場の所でフンフンを持って遊んでいる子どもが、私に「オッサン、このフンフンどうして足を動かしているか知っているか」と言うのです。いつも幼児にそういった点でしてやられるので、そのときは必ずうまく返すようにしているのですが、あ、なぜだろうな、ぼくと思う。というふうに返したのです。そうしたところが、「飛びたがっているの」と一言言ってくれた。それには、わたくしも次の句が出なかったのですけれども、なるほどその通りであって、おそらくもがいているというこ

とは、飛びたがっているのたろうと。わたくしもそのとき子どもから教えられたのです。そういうここの子ども自体が、すぐに対象の気持になれるということ、そういうところが我々に欠けている一つのものじゃないかと思う。いつもその点で、この幼稚園へ来ると教えられる。だからそういう子どもに、つとめて接するように、それを楽しみにして今までやってきているわけです。職員室へ入るとわたくしの顔を見るなり、すくに、きょうたくさん言われたようなケースが、番にとび出してくるわけです。授業より先にじつはきのうこういうことかあったとか、いろいろのケースが出てくるわけです。そういうような子どもの成長とか変り方とか、きょう津守先生がこういうことを使われましたが、「きのうはこうであったか、きょうはこう変わった」という、たれもあたりまえに思うようなことに、非常な驚きをもって、まなこを輝かせておられる。これが子どもの成長をほんとうに助けているのじゃないかと思うのです。それから、わたくしは、子どもをどうい

うふうにさしているのじゃなろうかと思  
っております。それからもう一つは、さき

ほど、「子どもが子ども自身でありのま  
ま」ということが、津守先生のことばの  
中にありましたが、なかなかできないこと  
ですけれども、先生自体がやっぱりありの  
ままでなければいけないということは、わ  
たくし、この頃強く感じております。それ  
は、今虫の話で教えられましたけれども、  
子どもはほんとうに子どもなりにされるの  
ですけれども、教師はなかなか自分のま  
まになれない。次はどういうふうに上手に言  
ってやろうかなと思って、質問を受けたと  
きに構えてしまう。構えてしまっている間  
に、子どもは先に答を言ってしまったとい  
る。こういうのでいつもこちらがゴテゴテ  
にさがってしまう。それはやっぱりこちら  
に素直さがなければいけないかということ  
を、じつは強く感じているのです。そうい  
う点で、教師自体がりのままになる、素  
直になる、ということができないければ、な  
かなかこういう指導ができないのじゃない  
か、とこんなことをここへ来ていろいろ

わたくしが学ばしていただいたようなわけ  
なんです。

#### 司会者

どうもありがとうございます。き  
ょう午前中ここで見ながら、いろんなこと  
の話を小耳にはさんでおりますと、いつた  
いこの中で指導ということがどう行なわれ  
るだろうな、というようなことを言って  
いらっしゃるかたもありましたが、前に報  
告になりましたいろいろの事例、あれはす  
ばらしい指導の例だと思えます。それで今  
言われたありのままのその中に指導が生ま  
れてくるし、その中に指導が入ってくると  
きにはほんとうにそこに地についた発展とい  
うものがあるのだと思います。きょうこち  
らに伺って、世界中に幼稚園がたくさんあ  
っても、先生がたがこれほど熱心で、こん  
な夕方遅くまで議論しあう日本の幼稚園  
は、世界に誇ることができると思えます。  
きょうはわたしの司会で、たいへん不手  
ぎわで時間がどうも超過してしまいました  
が、さきほど解体それ自体あまり問題では  
ないと申しましたが、今のままでみんな  
いのじゃなくて、できればこういう解体が

できることは、これは大きく一歩前進であ  
ると思うし、クラスの解体ではなくてもど  
こかでそういう壁を打ち破ることが必要だ  
と思う。いいことのためには、それだけの  
勇気をもって努力することを、わたしたちも  
ともどもに考えていきたいと念願しており  
ます。

#### 予 告

##### 幼児教育講習会

日 時 昭和 39 年 7 月 22 (水) -- 25 (土) 日

午前の部 9.00--12.00

午後の部 1.00--4.00

会 場 お茶の水女子大学講堂

主 催 お茶の水女子大学附属幼稚園内

日 本 幼 稚 園 協 会



## ヨーロッパの旅 (二)

平井信義

ハイデルベルク城のテラスで偶然に出会った学生といっしょに、私どももケーブルカーにのりこみ、山を下った。その学生に会ったことが、何か私どものところを引き立ててくれている。旅にはものうい一面や悲しい一面があるものだ。しかし、この日以後、悲しかったりもの憂かったりする時があると、きまってこの二人の学生のことを思い出した。そして、二人を励ます気持ちが、同時に自分の心を励ますことになるのであった。

二人の学生にも、私どもに会ったことが心をひき立てる一助になったようだ。カフェー「赤い牡牛」へ先導する私のあとから、家内と肩を並べて歩きながら、イタリヤからスイスを抜け、ドイツに入り、そしてこの町に通りつくまでの話をさかんにしている。ヒッチハイクだから、なかなか自動車がつかまらずに、苦勞

することもしばしばあるらしい。自動車がとまらないので、二時間も道路脇で立往生しなければならなかったこともあるという。しかし、サンフロン峠を越すときは、スイスの大会社の重役の大きな車のソファで、ふんぞり返っていたという。「気持ちよかったですよ!」と、二人は目を見合わせて微笑する。私も、「さぞ気持ちよかったですらうな」と思う。宿は、ヨーロッパ各地にあるユースホステルを求めるのだそうだ。ここに泊る限り、一日一ドル以内ですむ。その代り、朝、ちゃんと雑巾掛けをしたり掃除をしたりするのでよ」という。その目には、そうするのが当然だというように輝きがあった。実に若々しい輝きである。

そんな話をしながら、カフェー「赤い牡牛」に入った。うす暗い部屋が広く続いている。いくつかの食卓がうすたなく置かれ

ている。壁には、ところ狭しと、写真だのサインのしてある紙だの、剣だの——さまざまなものが掛けてあって、目をどこにとめておけばよいかわからないほどである。

「この辺にしましょうか？」

と、私の先導で入口から右手の食卓に腰をおろした。この学生には、家内と私の間に坐ってもらい、私どもは向かい合うように坐った。多少とも日本的な家庭的な雰囲気を作るように、小さな心づかいをしたつもりであった。

「何を食べましょうか？」私は二人にきいた。

「何でも結構です。何しろ、食事としてまとまったものは、このところ食っていないし、ドイツ語は全くわからないのですから……」

「旅行中、ことばはどうしていいのですか？」

「ぼくらは英語しかしゃべれないので、実は困ることもあります。何かやっています」と二人は言う。

たしかに、何とかやってきたのだらう。既にイタリーからスイス、西ドイツと、渡り歩いてきたのだから……。そしてことばでは本当に困ることもあるだろうと察せられたが、そうした困難を愚痴っぽく言う気配は一つもなかった。雄々しいというべきではないだらうか。

私はメニューを見ながら、量が多くてしかもうまそうなものを

選んだ。

「どうでしょう、牛のカツレツは？」

「すてきななあ！」と一人が大声をあげた。「それで結構です」と、二人は食べるものなら何でもよいという表情で答えた。

「何しろ、立ち食いばかりしてきたものですから……」と一人が、頭をかいた。

私も、この前のヨーロッパ旅行のとき、しばしば金欠病にかかったのを思い出した。特に日本に帰る途中、イタリーあたりからその病気が著しくなり、アテネに滞在中は、四、五回も、町の辻で完っている一本一〇円也の焼とうもろこしで空腹をしのいだものである。それは、醤油はもちろんのこと塩もついていなかったし、とうもろこし自体の味もよくなかったから、ただ、空腹をまぎらわす程度であった——といってもよい。それと同じようなことを、この二人の学生がやっているのだと考えると、懐旧の情はひとしお深かった。

われわれの前にある厚板の食卓は、隅から隅までいたずら描きでいっぱいであった。いたずら描きというよりも、小刀か何かでそのいたずら描きがかなり深く刻み込まれていた。過去百年以来、ハイデルベルクで学ぶ学生がここに飲み食いしてきた、いろいろといったずら描きを楽しんだものが、このように溜つたものである。その中にぼつと漢字もまじっている。わが国でも高校

生るときから、このハイデルベルクに懨懨をもった者が、多数にあつたはずである。そして遂に遊学の目的を達した人たちが、この食卓に、記念の刻みを入れたかも知れない。

「しかし、昔の学生と今の学生がちがう以上に、時代も大きく変化してしまいましたね」と、一人言を言うように、私はいった。

世界が、いまほど大きく変転している時はないのではなからうか——という気持がしみじみとくるような部屋の雰囲気である。ドッと笑い声が起こり、男女の学生であらう、部屋の隅に六、七人いて、何か一と言二と言言つては笑い声を立てている。しかし、それも、十九世紀の学生とは非常にちがった笑いの内容をもっているのではなからうか——私は、漠然とした思いにぼんやりと時を追っていた。

しばらく待った。ようやく太ったおばさんがビールのジョッキを持ってきた。そして、めいめいの前にそれをおいた。早速、「では、ブロースト！」

ジョッキを高く捧げて、まず、健康を祝った。そして、これらの旅が、楽しく繰りひろげられますように——という祈りを、ここにこめて、もう一度、

「ブロースト？」

といった。

ひと口のビールがのどを通ると、

「うめーなあ」

「うまいなあ」

二人の学生は、顔を見合わせ、歓喜の目差しを私の方にむけた。

「ほくも、今日は特別おいしい」

私もまた一と口、ぐっと飲んだ。アルコールに弱い家内までが、ジョッキをあげて、一人の学生の目をじっと見詰め、ジョッキに口をつけてはまた、もう一人の学生の目をじっと見るのであつた。それを私もまた祝福する。その間、私のところをきりっと引き緊めてくれる雰囲気があつた。

やがて、二人の学生の前に、どかっ——といつてもいいくらい大きなカツレツが白皿にのせられた。野菜の酢づけも、ガラスの皿にのせられて、肉の皿の横におかれた。

「うわっ、すげえなあ！」

と歓声が一人の学生の口から迸り出る。そして、あまり器用とはいえない手つきで、カツレツにフォークとナイフをあてがう二人。私どもは、そうした二人の動作に見入りながら、うれしくてたまらなかつた。それは二人にほれ込んだ——といった気持からであつた。

肉を口に入れた一人が、また、

「うめえなあ！」

と歓声をあげた。それは、全くここからこみあげてくる歓声であつた。素朴な学生の叫びである——といった方がよい。

「どうぞ、たくさんあがつて下さい。足りなければ追加しますから」

「うめえなあ。ほんとに、うまい」

こんな会話が二、三度繰り返されているうちに、カツレットはどんどん小さくなっていった。

「うちの子どもたちにも、このような旅行をさせたいものだ」

——私のこころには、日本に残してきた三人の子どものことが、頭をかすめた。この二人の学生のように、いろいろな辛さに耐えて、雄々しく世界を歩きまわることのできるような人格を持つて欲しい、——こんな考えが、涌いたのであつた。

二人の学生は、今日ハイデルベルクを出発して、マインツにいき、北上して西ドイツからオランダに出て、イギリスまでヒッチハイクを続けるという。まだまだ、苦勞の多い旅が続くことであろうが、どうかそれに耐えて欲しい。私どもは、それを願つた。

食事が終ると、私どもの腹はいっぱいになった。学生たちも、大きなカツレットに、腹がいっぱいになったようであつた。ビールもジョッキ一つで、もう真つ赤な顔になっていた。

「ほんとに、おいしかったなあ！」

「おいしかった」

二人は、顔を見合わせていった。その顔付きをみて、私どもも満足した。

「ここへ来た記念に、このジョッキを持って帰りたいな」と私は言つた。この「赤い牡牛」では、記念にジョッキを譲ってくれるのである。

「いいですか、持っていくても？」

と二人は、うれしい氣持を顔いっぱいに現わした。

「いいですとも、生涯の思い出になるでしょうね」と、私は答えた。

「時に先生、先生の学校と、お名前をきかせて下さいませんか？」と、学生の一人がメモ帳を出しながら、私に向かつていった。

「どうでしょう、それを言うことは、やめにしようではありませんか。ぼくたちは、あなたの方お二人の意氣に感じ入つて、こうして食事をいっしょにしていたいたまでです。名前を申し上げて、それで、あなた方がぼくたちに恩義などを感じるようなことがあれば、ぼくたちの氣持とはちがつてしまうわけです。だから、どうでしょう。名前などをお互いにあかすことなく、ここだけの感激をお互いに心に秘めてお別れしようではありませんか」

私の提案に、学生も納得したようであつた。そして、それ以

上、私どもの名前をきくことをしなかった。

間もなく、四人は「赤い牡牛」を出た。そして、市電の線路に沿って、汽車の駅の方に歩き出した。

「荷物が駅のボックスに預けてあるので、それをとってから、ヒッチハイクをしなければならぬのです」

「では、ごいっしょにいきましょう。私どもも駅に荷物を預けてあるのですから。しかし、その前にもう一度、ネッカー河をみていきましよう。アルトハイデルベルクのネッカー河に名残をこめて……」

「ぼくたちもお伴します。ごいっしょさせて下さい」

四人は、いく度か市電が来るのをよけながら、狭いメインストリートを歩きながら、ハイデルベルクの中心街に出て、そこを右にまがって、ネッカー河に出た。橋のたもとから見ると、ネッカー河は七年前と変わらないように流れていた。その流れは、七年前と全く変わらないように思えた。流れ流れて、大西洋に流入する水なのである。私ども四人は、それぞれ思いをこめて、ネッカー河をあとして、市電に乗り込み、鉄道の駅にいった。

駅に預けてある荷物のボックスは、学生たちの場所と、私たちの場所とが離れていた。そこで、電車をおりるときようならの握手をしたのであったが、荷物をとり出すと、再びいっしょになつてしまった。学生二人と、私たち二人の間には、何去り難かい気

持があつたにちがいない。少なくとも、私たちのこの中には、そうした気持があつた。学生たちは、リュックサックを漲らせていた。何が入っているのか、はち切れそうであつた。そのリュックサックの背には、日の丸の旗がはりつけてあつた。

「こうして、日の丸をつけて歩いていると、たいへん助かります」と、学生はいう。「非常に親切にしてくれる人もあります」

日の丸のよし悪しはともかくとして、こうした学生が日の丸をつけてヨーロッパを歩き廻ることは、わが国の存在のみでなく、本国のよさを二人の学生に代表させることができる。おそらく、二人に会つたヨーロッパ人も、二人の素朴でまじめで、しかもフアイトのある意気に打たれるのではなからうか。国威というものを言うのであれば、こうした二人の力がいかに大きいものであるうか——と考えるのであつた。

「ヒッチハイクをしていても、ぼくたちはただのりはしていません。こけしとか、日本独特のちよつとしたものがあるでしょう。それを、お礼の代りにあげるのです。とても喜びますよ」

——これも、二人の人格からにじみ出ていることなのだろう。どんなものにしても、それを与える人の人格によってうれしくなり厭おしくなるものである。二人を自動車にのせ、そして二人からちよつとしたお礼を喜ぶヨーロッパ人たちも、結局は二人の学生の意気に感じたからにちがいないと思うのである。

いよいよ、わたくしどもは二人に別れる時間がきた。何回も、さよならさよならと言いたい気持であったが、私どもはいさぎよく二人に別れた。そしてフラットホームへと降りたつたのである。ミュンヘンへの旅が待っていた。

「それにしても、えらい学生だねえ」

私ども二人の口からはからずも湧いてでたことばであった。「何かして、こうして学生を海外に出したいものだね」と、私は家内に入った。そのために、国家ももっと真剣になって欲しい。この二人と比較するのもおろかしいことであるが、日本からヨーロッパに来るおとなたちが、いったい何を帰るのだろうか。殊に、代議士といわれる諸氏が、ヨーロッパに来ての行状は、どこにいても評判の悪いものであった。折角ヨーロッパに来たのに、どこへもでずホテルにとじこもって、選挙民に「うるわしのヨーロッパに来ました」という絵葉書を書いている代議士もあるというようなことを、方々でかかれた「ホテルの外に出ても特に政治の研究するではなし、むしろ、キャバレーとか女を要求する者もあるのですから、全くかないませんわ」と、怒りをこめて私に話してくれた人もいる。また、たぐさんに土産物を買う、という話もある。その点、事実かどうか私はよく知らない。しかし、最も私のところをとらえたのは、代議士諸氏が、国費をつかっているということである。一日に三〇〇五〇ドル（一万円から

一万五千元）を使っているということであった。このような国費（税金）の浪費は、私たちにとっては、耐えられない。これだけのお金があれば、三〇四〇人の学生をヨーロッパに送ることができると思うと、いっそう耐えられない。学生諸君は、足をヨーロッパの大地にふみしめ、大きな口をあけてヨーロッパの空気を吸い、二つの目でじつとヨーロッパを見詰めるだろう。しっかりと体験を通して、ヨーロッパのよさ、悪さを見抜くことができるだろう。そうなれば、いたずらに、ヨーロッパを讚美したり、ヨーロッパをけなしたりするようなことはしないだろう。

それ以上に、青年の勇猛心を養い、世界に雄飛する気持を導く絶好の機会とすることができると思う。——私は二人の学生が、既に広大なアウトバーン（自動車専用道路）にでて、行き交う自動車にむけてヒッチハイクを求める合図をしている姿を思い浮かべながら、ミュンヘンにいく汽車がくるのを待っていた。



# ガンバリの力を育てる

## 遊びと素材



(その一 ビー玉)

清水 エ ミ コ

### 〈目的〉

昨年は、感情教育に役立つ活動として、思いつくままに、失敗感と成功感のたやすく味わえるやりなおしの可能な教材をえらんで、物（子どもたち自身でくりかえしの可能なもの）との関係において感情表現をみる回を重ね、よろこび・かなしみの感情を積極的に変化させていく訓練をしながら、子どもたちのがんばる力を確かめてきた。

そして、その効果に驚くと同時に、子どもたちの持っているエネルギーの偉大さに驚かされたのである。

そこで今年は、くりかえしと、がんばりの力を計画的に確かめてみることにした。

○与えられた教材で楽しく遊ぼうとする態度を身につけさせたい。

○失敗したらやり直せばきっと成功する、という積極性を養いたい。

このような目的を主にして確かめてみることにした。  
昨年の活動の中で、子どもたちの材料に対する基本的な行動に気がついたので、（ころがす、まわす、はじく、ひく、おす、ふく、たく、ぶつける）これらも確かめてみたいと思い、子どもたちのまわりにある素材（教材）をみまわし、大ざっぱな年間の見通しを立てて実行してみることにした。

### 〈教材と計画のめやすと与えかた〉

○ひとりの落こ者も出さずに、子どもたちが興味をもって活動できるもの。

○失敗の程度があらかじめ予測でき、その失敗が何らかの方法です

くい上げられると思われるもの。

○その結果が劣等感にならず、がんばりの態度が身につく活動の発展が期待できる教材を考えた。

### 材料表

四、五月 ビー玉

六月 糸まき

七月 空かん

九月 紙のボール シャボン玉

十月 ジンシャク

十一月 空箱

十二月 袋

一、二、三月 四角、丸、三角の紙

教材を与える教師の態度は、それぞれの教材を環境として保育室の一定の場所に備えておくだけにし、子どもたちの活動の可能性をたしかめることにした。

### へ 四、五月 ビー玉

ビー玉五〇〇個（一年保育四〇名の学級のため、一人が十個平均持てるように考えた）を、入園して一週間目に保育室の戸棚の上に空箱に入れて出しておく。

始めの二日間は、入れかわり立ちかわり箱の中に手を入れて、いじってみるだけだった。三日目から活動らしいのがみられた。

### ころがす

○ころがっていくのを見て楽しむ

○床いっぱいにはらまく

「おんなじところからころがしてるのに、みんなちがうほうにころがっていく、おかしいね、たまにしかおんなじところにいかないよ」

ころがしたビー玉が偶然のぶつかり合いでいろいろな方向が変わったり、はじけたりするのを楽しみ、喜ぶ。

この遊びはビー玉を与えて一週間位、男児女児共入り乱れ、かわるがわる繰り返して遊んでいた。ビー玉をわしづかみにして、いっぺんにころがす（はらまく）。その時のガラスのふれ合う音やちらばり方などで、非常な解放感をあげわっていた子が目立った。内向的で友だちと遊びたくても遊べないというような子たちが、目の色を変えて何回も何回も繰り返していた。そしてぶつかった同志の思いがけない交わりが見られるようになり、その交わりが瞬間的なものであっても、しばらくの間そのもの同志で行動している。

○床に白ぼくで道をかいて、その上をころがそうとする

「ころがしな」とただひとこと相手に言うだけの子や、相手のかいた道の上にそっとビー玉をころがしておいてみて、相手の顔を見ている子、などで交わりなどとは言えないほどの軽いものだった。が、この遊びでもいろいろのことを発見した。



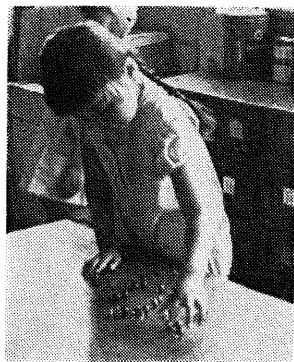
△まがった道をかいても、どんなにやり方を変えてみても、うまく道の上をころがらない。

△まっすぐな道にすると、道の上をころがるようになる。しかし、力の入れ方やちょっとした加減でカーブしてしまうことなどを学び、自分の指先に全神経を集めいろいろかげんしたり、繰り返し、やり直して試している。この時のひとりひとりの真剣な顔は何とも言えない力強さをみせている。

そして思わず、固く閉ざした口から「ワーあんたの　ここまわたって来た」とか、「ワーまたまがっちゃった」といったようなことばがもれてきた。

○机の上をまっすぐころがす

床の上ではものたりなくなった者たちが、机の上でころがしはじめた。そして、その時のスリル感が「むこうまで、だれがわたるかやろうよ」の声を生み、それにつられてみんなかわいい指先に全神経を集中させてビー玉



を押した。のせたところにホトンと落ちるものなどいろいろいたが、みんなホトンホトンと床に落ちてころがっていった。ころがっていくビー玉を腰をま

げてひろいながら「ようし、こんどこそ」とか「おまえ、ビー玉おかないでよ」とか、今度こそはとりきみながら、くり返している。(写真①)

そして、努力とくやしさが強くなりすぎた時、机のへりより中に入った所をころがす子がでてきた。そうすると「よっちゃんずるいやー、こんなところだれだっておちないよ」と相手を批判したりされたりすることもおこってきた。相手にずるさを指摘された子は、何とも言えないばつの悪さでれてしまっていた。私は良い葉だと思って、じっとみていた。その時、側でひとりっ子の、のり子がこれを見ていて、私のそばにそっとやってきて、

「先生　うちのお父ちゃん、のりこがずるしても、うまいぞ勝った勝ったっていうわよ」と言うのである。子どもたちはこうして集団の仲間どうしのルールやきびしさを、身体で知っていくのだなど、私は思った。そして、親が子どもを楽しませてやろう、よろこばせてやろうと思う甘いあやし方は、現代に生きる子どもたちには通用しないで、すっかり手の内を見破られてしまっているのを知られただのである。こんな遊びをくり返しているうちに、内気で人には何も発表することができず、他人に何か言われるとまっ赤になって恥ずかしがる、のぼるがまっ赤な顔で「みんな机のまわりに来てみな」と呼んだのである。そっと近づいてみると――

○机から落ちないようにころがす

のぼるが、「机のまわりにみんなが立ち、机の上をそれぞれのビー

玉をころがし合い、手や身体で机から落ちないようにしよう」と提案した。「よいいはじめ」と誰かの合図でビー玉が机の上に入り乱れて、ころがりぶつかり合い、そしてちよつとしたすきに机の下に落ちる。ビー玉がひとつ落ちるたびに、仲間たちはキャーキャーとかん声をあげたり、とびはねたりしてくやしがり、たび重なって落す子どもたちに「竹内君、きをつけなよ、ほらほら」「かずお君のここにもいくよ、ほーら」と応援し合ったり、人のことに気をとられて自分の前でボトンと落ちたのを見て思わず「残念、ゆだん大敵」となまいきなことばまでとび出すのである。

この遊びで、三人以上の友だちと長時間あそぶということを大半の子どもたちが体験したようである。また、男も女も一しょになつて遊び合うきっかけにもなつていった。何にもまして得がたい経験は何人かで一しょに遊ぶ時は、みんなと調子を合わせて（協力して）あそばなくてはならないことを知ったことだと思ふ。

「てっちゃんとのぼるちゃんのところはいつもおちないじゃない」「てっちゃんがきたよって言うから、ぼくがビー玉の方をみて向うにやるんだよ」というように、子どもたちは友だちの行動にも強い関心を示すようになった。そしてこの遊びでビー玉どうしのぶつかり合いに興味をもった者たちが多く、相手のビー玉をねらつてぶつけることが行なわれ始めた。

## ぶつける

### ○ころがして相手にぶつける

保育室の机も椅子もみんなかたづけ、室をひろげてビー玉をころがしてぶつけ合っている。登園してくる子、誰かれ構わずに入口で孝教がビー玉を渡して「はい、これどうぞ」と言つて渡されるとき、みんな魔法にかけられたように室の中に入ってビー玉をころがすのである。その自然さに、私は驚きと同時におかしさを感じてきた。入口から入ろうとする私にも孝教は「はいどうぞ」とビー玉を渡してくれた。室の中はハチン・ハチンワッハッハ・ワイイなどビー玉のぶつかり合う音と歓声が入り乱れていた。私も腰をおろして、ビー玉めがけてころがした。バチン、私も思わず「あたつた」と言ってしまったほど雰囲気はより上がっていた。女児たちも全力を入れてねらっているが男の子にはかなわないようであった。

あまり力を入れすぎてころがし相手のビー玉に当らず、壁にぶつかつてはね返つて来たのを口惜しがったり、相手が力まかせにころがしたのがぶつかつてビー玉が二つに割れてしまつたり、しゃがんでいるお尻の下をスピードで通り抜けるビー玉を見て「トンネル通過」と大声をあげたり、「君とぼくといっきうち」といったりしておもしろいように遊びが変化していった。子どもたちは考えようと意識しないで、考えている姿を見て、雰囲気（環境）の力の偉大さに驚かされると共に、環境設定が如何に大切かを、目のあたりに見せられた思ひであつた。

○もとめて

ママゴトコーナーで遊んでいたはるみが、ころがって散らばっているビー玉を集めていた。そして、茶わんを床に置いた時ビー玉がころがってきて茶わんにぶつかり、茶わんを倒してその中に入った。「わー入っちゃった」と嬉しそうにビー玉をころがした雄一が近よって来て、はるみに笑いかけた。はるみも「入ったね、もう一回やってみな」と言って茶わんを立てた。しかし、今度は何度やっても入らない。「横にしてやれば」と見ていた伸子に言われ、はるみは茶わんを横にして押えた。雄一のころがすビー玉の大半は茶わんにころげ込んだ。これを見ていた清志は積木でかこい「を」をつくって、その中にころがし込んでいた。また和広は三角の積木をまどにして当てていた。これを見て清志が「ぼくも寄せて」と和広のまどあてに加わっていった。

このように、ビー玉のころがった先の偶然が子どもたちをいろいろの遊びにきそっているのである。こんな様子を毎日みていると、ただのガラスのビー玉に何かもの凄いが秘められているような気さえてきたのである。

#### ○射的ごっこ

このまど当てはしばらく続けられ、画用紙で人形を作って倒しっこしたり、その人形に点数がかかれ、その点数によってビー玉の数が決められていて、賞品代りにその数だけビー玉が貰え、誰が一番たくさんビー玉がたまるか競争したり、ルールに複雑さを加えてきたのである。

#### ○ままごとのごちそう

この頃になると女兒はあまり、ころがしたりぶつけたりしなくなつた。そしてままごとの中にビー玉を持ち込み、ごはんにしたり、「たまご割ってくださいな」と卵になったり、「肉ボールね」とおかずになったりしていた。「ごはんは箸で食べるんだもの、箸ではさむのよ」と久美子が額にしわを寄せてどなっているので行ってみると、純子が茶わんの中のビー玉を箸でかきまわしている。私の近づいたのを見て久美子が、

「先生、純ちゃんビー玉はさめないんだよ」と言うので、「久美ちゃんはある」と聞くと「あたしできるよ」とママゴトの箸でビー玉をつまんでみせた。そこで、まわりにいた数名に次々にはさんでみるように言うのと、上手にはさむ子とコロツところがす子と半々だった。

#### ○ビー玉つまみっこ

その日の活動を変更して、ビー玉つまみをゲームに仕組んでやってみた。ママゴトの茶わんに、割箸でビー玉をはさんで入れっこし、誰が何個入れるかやってみた。あわててひとつもつまめない子、落ち着いて夢中になり10個もつまんだ子、それはそれはみんな真剣である。何回繰り返ししてもつまめない、ぶきつちよな子の淋しそうな顔がみられたので、赤・白に分れて団体ゲームをすることにした。一定の場所で、きまった数のビー玉をおちゃわんに一個ずつ親指と人差指でつまんで入れて、次の人に渡す（パトンの代りに）。

次の子は、それを持って一定の場所までかけて行き全部こぼして、またひとつずつ、つまみ入れるというゲームに仕組んでみた。今まで箸でつまめなかった子も、中でつまむため気楽に楽しんでやれた。そして、あわて者やわがまま者は、ひとつひとつきめられた指でつまむとかしきから、わしづかみにしてしまい、皆から「ずるい、ずるい」とはやしたてられ、ていさい悪そうにやり直したりした。

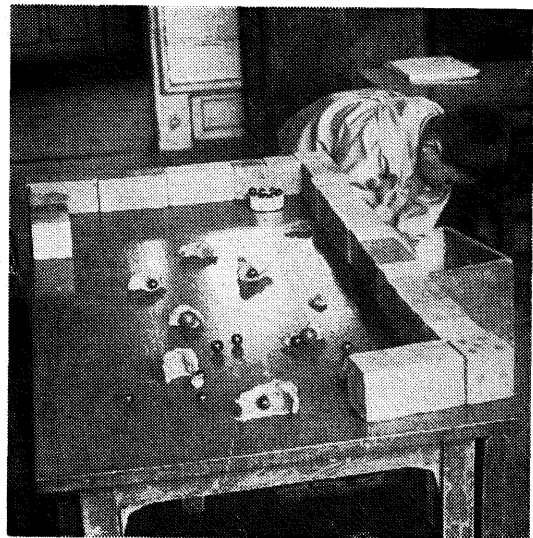
こんなことから思わぬ性格があらわれたり、今まで味わったことのない忍耐をさせられたり、子どもたちには楽しい中に種々の課題があったようだ。正直に言って、このゲームは、どの位指先の運動が可能なのかをみたかったのと、箸でつまめなかった子の劣等感を取り除かねばと思う軽い気持ちでやってみたので、これほど子どもたちの学習の場になろうとは思わなかった。この日は、ビー玉を与えてからちょうど20日たっていて、この間、一日もビー玉で遊ばなかった日はなかった。そしていつとはなしにビー玉の数が三分の二に減っていた。この頃になると与え始めのように、だれもかれもがビー玉で遊ぶというのではなく、興味がでてきた子がかわるがわるビー玉で遊んでいるというように変わってきていた。

## は　じ　く

### ○バチンコ

机のへりのぐるりを箱積木で囲い、ところどころに粘土でくぼみをつくって、置き机の一隅を細くあけ、そこからビー玉をころが

②



し、粘土のくぼみどころがし込む。そのくぼみには 3・5・7 と白墨で数字が書かれ、その数に入ると、見ているまわりの子が「ジャラジャラ」と言ってその数だけビー玉をあげる。この遊びでは、手どころがすのとビー玉を積木ではじき込むのと二通りに遊ばれ、父母と町で見たバチンコ屋そっくりである。三〇個たまったら「ぼく、大きいチョコとるんだ」と言ってうすい積木をチョコに見立てたりしている。(写真②)

### ○コリントゲーム

この遊びを見ていた康弘が、机の上に積木で迷路のような道を作り、片すみから積木でビー玉をはじき、そのころがり方で点数をきめる遊びを考えだした。

この遊びを見ると、ビー玉と他の遊具とを組み合わせて遊ぶうとする様子がみられるようになってきた。空箱の底に穴をあけその中にビー玉をたくさん入れて、両手で箱を左右に動かし、箱の穴からビー玉を落して楽しんだり、画用紙の上にビー玉をのせ、落さないように歩いたり、といったように遊びがひとりで工夫されるようになった。ビー玉と力入れ方などを、くり返しくり返しやり直しながらだんだんできるようになった。

### 坂をころがす

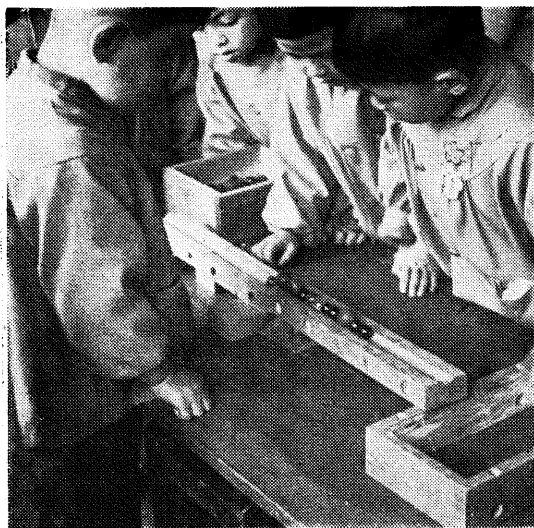
○組木と一しよに（子どもたちは真剣に実験していく）

六月に入ると組木を一しよに使用して遊ぶようになった。そしてその遊びが毎日毎日ほんの少しずつの変化と進歩をしながらなされていくのには驚いた。

まず、まん中にくぼみのある組木の上をころがす。（写真③）

そのうちに、一個ずつでなく十個位連続させてころがすようになった。粘土で先頭を押えて止めておき、ビー玉を並べながら粘土を取り除ける、と同時に一番終りのビー玉を押す。ビー玉が列を作ったころがり、机の上に次々に落ちて散らばって、床にころがっていく。何でも不思議がる竹内がこの遊びをしていて、「先生、どうして

同じ所から、おんなじに落ちるのに、いろんな方にころがるの」と真剣に不思議がって質問してきた。私にも科学的な正しい答え方はできないので、「不思議ね、どうしてかしら」とだけ言うと、一個のビー玉を拾ってきて光に透かしてみても、「先生、ビー玉の中にボツボツしてるのが入ってるから、あれが決めるんじゃない？ きつとそうだね」と言いながら、何回も何回もころがしては床に散らばして試している。これを一しよになってやっていた和広が「竹内君、みんなこぼして、拾うのたいへんだよ」「そうだ、積木で入れものを作



ろうよ」と、ころがり落ちる所を積木でかこった。

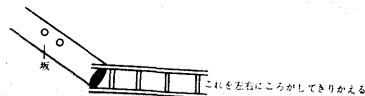
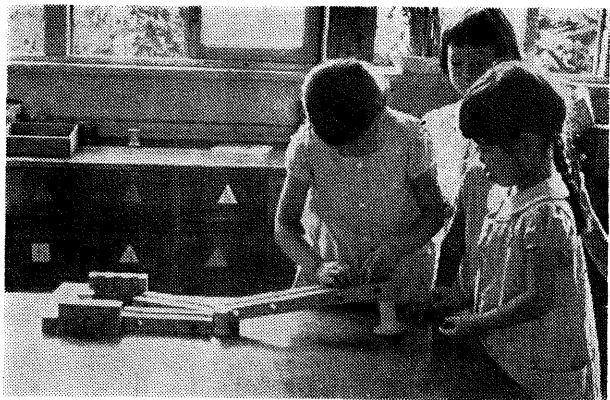
「坂にしたのね」と保育室で遊んでいた昇が登園して来た。竹内と和広に言くと、「へーおもしろい」とすぐにそれに加わり、組木をいろいろに重ねて高くしたり低くしたりして、ころがりぐあいを楽しんだ。

#### ○部分品がくつついていく（トンネル 鉄橋）

坂の途中にトンネルがついたり鉄橋がついたりしていった。トンネルは簡単だが、鉄橋はちょっとたいへんだった。組木と組木の間にはさみ込まなくてはならないし、組木の継ぎ目が重なって、そこにビー玉がつかえて止ってしまい、何度も何度もやり直し、しまいに画用紙の鉄橋を考えだしたりして、小さい頭は四苦八苦し、四、五名集っては何とか解決していく。トンネルも画用紙で長いのを作ってみたが、坂の傾斜がゆるくトンネルの中でビー玉が止ってしまつて、皆が大笑いしながらもどうしようかと考え合っている姿は真剣そのものである。そして坂を急にして、ころがりすぎてびっくりしてトンネルの中をのぞく子や、もう少し低くしてみろ子など、入れかわり立ちかわりやつてみるようになった。庭から何かの都合で（おもちゃを取りにきたりして）入ってきた子まで、ちょこつとビー玉をころがして出ていったりしている。

もうひとつの組木（フレーヘル製）、階段のように四角い穴があるものを組み合わせて、切りかえなどが考えられた。（写真④）溝のある組木に細い棒を立てそれに四角い組木をはさんで、ころ

④



がってくるビー玉を右へ、左へと切りかえる。徹也が偶然にやり出したことなのだが、みな大よろこびでかわるがわる切り変え番になってやっていた。傾斜の加減でとんでもない方向にはじいたり、ゆるすぎて切り変え損ねたり、みんなキャーキャーかん声をあげて遊んでいた。

○ころがりの反動を楽しむ

組木をゆるいV字型にしてころがし、反動でどこまで坂を上るか、試していたり、反動で坂を上がっては、下の囲いにくろがりこませたりしていた。

組木と組木の間を開けておいて、そこを飛び越えて向う側の組木に渡るようにする。これは驚く程何度も試され修正されていた。

○傾斜が小さすぎてほとんど落ちてしまうもの。

○間隔が開きすぎて、反動で飛んできても途中で落ちてしまうもの・傾斜が急すぎ次の組木の角にぶつかって、とんでもないところにはじめてしまうもの・力いっぱい手でころがして組木からはずれてしまうもの・組木と組木の位置が、まっすぐでないために、途中でこぼれてしまうものなどで、なかなか成功しなかったが、昇と徹也は真剣にビー玉と組木に挑戦し、ついに征服した。みごとに通過するのを見て思わず、「成功」と叫び「やっと渡ったよ、たいへんだつたよ」とため息をついたほどだった。茂がそれをじっと見ていて、「まっすぐ継がないと、こぼれるね」とか「坂がちょうどよくないと、おっこっちゃうね」と言う。実際に手を出して経験しない子まで、見ているだけで学習していたのには驚いた。そしてこれを機に友だちと交われない茂が机のまわりを積木で囲い、「川に落ちたのはこっちで集めるよ」と言って遊びに加わっていったのである。

○いろいろの傾斜を確かめる  
△長い道をころがす。

高くしたり低くしたりしてころがしていた正光が、とつぜん竹内

に「竹内君ちょっと来てよ、ほくうんと長くころがそうと思うの、いっしょにやらない」と、助けとも誘いともつかない呼びかけをした。試すことの好きな竹内は「うん」と、すぐいっしょに、長くつなげた組木の上をころがし始めたが、傾斜がゆるくて途中で止ってしまった。二人で「へんだなあ」と首をかしげ、真剣に何回も試していたが、しまいに、「そうだ高くするんだよ」との竹内の声に、「そうだっけ」と言いながら、一方に積木を積んで傾斜をつけ成功させたのである。

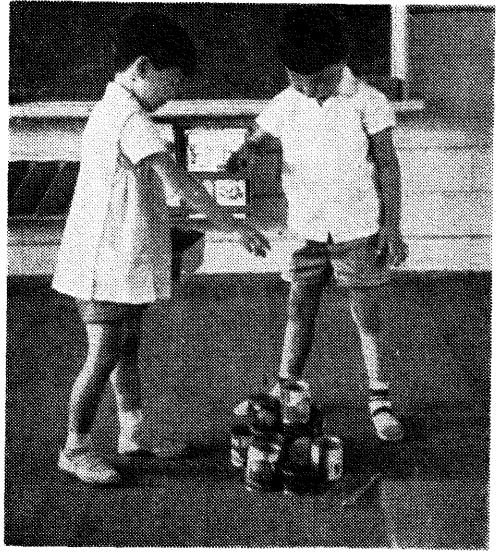
△ビー玉受けに変化がついた。

ころがってくるビー玉を受けるか、いかにいろいろ変化をつけることを、正光が考えついた。粘土で当りはずれの区切りをしたり、積木でいろいろの形をつくって玉が入り込むスリルを味ったりした。

△夢の超特急・こだま・各駅停車で競争させる。

まずえが一人で道具戸棚の上にビー玉をころがしては、落ちると急いで拾い、「どうしてこっちへって向かそうとしても、違った方に動くのかなあ」とひとり言を言いながら何回も繰り返していた。そのうち、早苗が近づいてきて、「このはじ、積木やれば落ちないわよ」と言ったので、まずえはさっそく積木で防波堤を作って中をころがし、「ほんとだ、ぜんぜんおっこちないね」と言ってから、身体ごと早苗の方へ向きなおって、「早苗ちゃん、ビー玉っておもしろいよ、おんなじにまるいでしょ、おんなじ大きさだね、それでおんなじにくろがしても、いっぱい走っていくのとすぐ止っちゃうのとあ

(5)



るんだよ」と、とても不思議なことを発見したように問いかけていた。早苗が何と答えるか興味をもって、聞き耳を立てると、「フーン、そんなことないでしょ」とおとなぶった答え方をしてから、「どら」と自分で試した。そして、「ほんとだねおかしいね」と言っているところに桃子が入ってきて、「早苗ちゃん何やってんの」と言うなり、溝のある組木を戸棚の上にのせて、ビー玉をころがした。積木の一方の下に組木を台にして、急な傾斜を作ったころがしたので、ビー玉は手を離れたとたん、勢いよくころがって戸棚にぶつかって、落ちた。まずは「急行だね、これ夢の超特急ね。早苗ちゃんこ

ま号ぐらい早い作りなよ。ここじゃだめだから、机の方でやろう」と机に組木を運んで作り直した。早苗も「うん」と明るく答えてから、「そんな桃ちゃんは普通の汽車にすれば」と言って机の片すみを空けていた。この時、庭から室に入ってきた正光が「それはね、各駅停車だよ、ぼく手伝ってあげるよ」と、組木と机上積木を持ってきてゆるい傾斜を作りだした。「ワー、速いよ」

感きわまったようなますえの声が室の中に広がり、その後入れかわり立ちかわりビーボーとビー玉をころがしていた。

△康弘が「おい、みんなここにならんでいるだろう。いちにいのさんでころがして、どれが早いかやろうぜ」と言ったので、近くにいたものたちで三人組が作られ、ジャンケンで夢の超特急・こだま・各駅停車と決めて、ころがし合っていた。「やっぱり夢の超特急が早いね、その次がこだまだよ、びりが各駅停車だね」と、今さらのようには感心している子が多かった。

△こだまになって負けた竹内が「よし、もう一回やろうぜ、今度こそぜったい負けないぞ」。夢の超特急になった正光も「負けないさ、やろうぜ」と各駅停車の京子を呼んでころがした。この時、竹内はビー玉に力を入れてころがしたので、夢の超特急を負かしてしまっただ「わーい、夢の超特急を負かしましたー」と、とび上って喜んでから「ねえ先生、高い方からころがすと速くころがって、低くて平らみたいな方からやるとのろろと遅くころがるんだね。もっ、と、もっ、と高いところからころがせば、あっという間にころがっちゃうね



おもしろい、おすべりと同じだね」「ほくためして、みるんだ、いろんな高さ作ってやってみよう」と、積木と組木でいろいろな種類の坂を作ってころがしていた。そして、まわりにいる子にも、ころがすことを許していた。いつもだったら「だめ」とか「いや」とかいうことが聞かれる子なのに、この時ばかりは一度も聞かれなかった。そして、「先生一番高いのは落すのと同じだね」と、言うのである。

このように子どもたちは、自分の指先ほどのビー玉に全身でぶつかり、何十種類もの確かめや繰り返しをした。

これらのビー玉遊びは、毎日毎日、誰れとはなしに遊ばれていた。

昨年試みたシャボン玉・シシャク・コマなどにみられた集中のしかたとは違い、長期間波がなく続けられた。そして、シャボン玉・シシャク・コマのような急激な発展や発見ではなく、ほんのわずかの、ゆるやかな発見と発展であることを知った(例、傾斜の変化、ビー玉受けの変化)

○ビー玉遊びでの子どもたちのあらわれから

△思いがけない、ほんのわずかな事柄を不思議がる。(例、ビー玉のころがり方)

△偶然、思わぬ時と場所で、思わぬ交わりを持つ。(例、ぶつかったどうしの交わり)

△自分で試めし繰り返し返して、がんばらなければ、失敗を成功に変え

る事はできないことを知っていく。(例、繰り返ししているうちに、力の入れ方・離し方のこつを身につけていく)

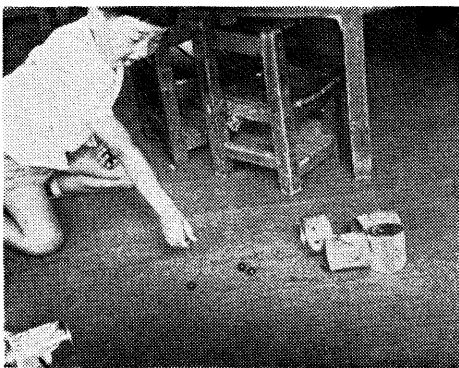
△繰り返しの中から、スリルを掴み、ルールを作って遊ぼうとする。(例、まっすぐころがす、コリントゲーム、夢の超特急、こっこ)

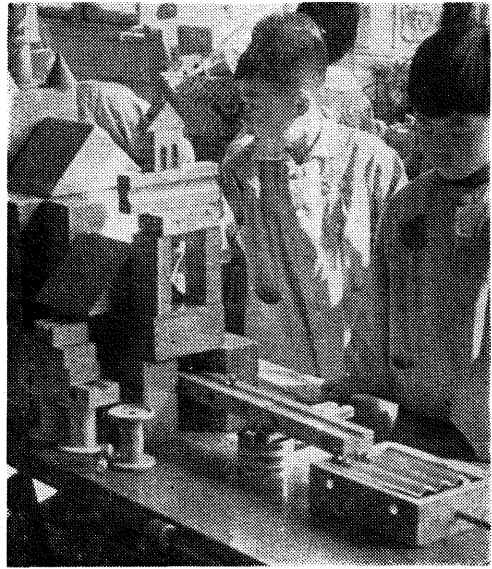
△失敗によってくやしさを味わい、くやしさが正しく感覚に浸みわたった時、今度こそとがんばる力が生れてくる。(例、いろいろの傾斜をころがしてみても「アアア、やっと渡ったよ」と言った)

△失敗のつらさがルールのきびしさを知らせる。失敗のつらさは、ずるさを育てるが、仲

間に指摘されることによりルールのきびしさを知り、正しくものを見る態度が育っていく。(例、机のへりから落さないようにころがす)

△繰り返し返しの経験が、仲間を助け励ます協力の方法を、理くつではなく体験として、身につけていく。(例、失敗しすぎる子を、みんな





が応援し励ます)

△繰り返し返しの経験で、意識しなくても考えるようになり、何度も考えて発展させていく、

△ほんの少しの変化も、子どもたちは見逃がさず自分たちのものにしていく。科学的に考えるようになる。(例、傾斜によって、ころがる速度が違う。指先ではじき方やころがし方で、方向が変わる)

△失敗したり、何度も繰り返ししている時は、ひとりひとりの性格がよく表われるので、指導の手がかりとなる。(例、すぐあきらめる子、できるまで頑張る子、チャンスを上手にとらえる子)

△失敗による繰り返しで、仕事を正確にすることを体験する。(例、きちんと正しくしないと、ころがらない。組木をきちんと合わせたり重ねたりしないと、思うようにころがらない)

以上述べてきたような子どもたちの姿を見て、くりかえすことにより、如何に効果があるか、がんばる力が進歩するかを目のあたりにみることができ、今まで町で、かけごととして遊ばれていたのと同じビー玉が、こんなに良い教材であること、こんなに小さなガラスの玉がこんなにも簡単に失敗させ、繰り返しさせ、そして発見させ、発展させ、成功させてくれるものである事を知り、おそろしさを感じた。

更に、子どもたちの遊びの基本型をも合わせ確かめることができた。基本型を挙げてみると、

ころがす

そつところがす

押してころがす

ねじってころがす(ひねる)

坂の上へ押し上げてからころがす

落してころがす

ぶつける

そつとぶつける

たたきつける(投げつける)

はじく

一本指ではじく

二本指ではじく

他の遊具教材ではじく

投げる

ほうり投げる

投げ込む

投げころがす

投げ当てる

つまむ

指先でつまむ

棒でつまむ

つまみはじく

つまみあげる

つまみ落とす

その場その場で、このような基本型を組み合わせさせて遊ばれ、驚くほどの繰り返しと発展がみられることがわかった。

終りに

今までの、おとなのビー玉に対する概念とは全く異り、六月の糸巻、七月の空かんの遊びの中にもビー玉が取り入れられ、ますます発展していった。この間、三百個を補充したのだが、どの教材とも組み合せて遊べるように思われた。(写真⑤⑥⑦)

このように、私たちは身近にある教材を見落している事を感じ、強く反省させられた。そして、もっと、忘れられ埋もれている教材を見つけ出して、これを子どもたちに与え、確かめていくことが、私たちの教師のつとめではないかと、しみじみ感じたのである。

(足立区立関屋幼稚園)

## 日本保育学会第17回大会

日時 5月23日(土) ~ 24日(日)

会場 日本女子大学

内容 (イ) 研究発表

(ロ) シンポジウム

(ハ) その他

参加資格 正会員 準会員(当日受付)

連絡先 東京都文京区高田豊川町

日本女子大学児童学科研究室内

日本保育学会第17回大会準備委員会

電話 (941) 三三三二 内線 17番

# 第十三回 幼稚園教育実際指導研究会

—新幼稚園教育要領の深究—

主催

お茶の水女子大学附属幼稚園

幼稚園教育研究会

協賛

お茶の水女子大学

教育研究室・児童研究室

附属小学校・中学校・高等学校

かねて幼児教育関係者の関心事であった、幼稚園教育要領の改訂がおこなわれ、本年度よりそれが実施されることになりました。つきましては、皆様も熱心にご研究を重ねておられることと思いますが、本研究会では、幼稚園教育全般にわたって、新教育要領の趣旨とするところをいっそう深究し、その問題点をさらに解明することを、本会の研究課題といたしました。そして、この機会に、新教育要領をもととして編成した本園の教育課程を発表するとともに、恒例により、本園の実際指導の一端を公開して、皆様のご批正をえたいと願っています。

なお「幼児の教育」六月号を、本テーマに基づくと集としました。

日時 昭和三十九年六月五（金）六（土）七（日）の三日間

会場 お茶の水女子大学講堂

講師

津 守 真

お茶の水女子大学講師 船 川 幡 夫

お茶の水女子大学教授 附 属 幼 稚 園 長 坂 元 彦 太 郎

実  
際  
指  
導  
  
 会  
員  
  
 会  
費  
  
 申  
込  
期  
限  
  
 申  
込  
場  
所  
  
 宿  
泊

お茶の水女子大学附属幼稚園職員一同

幼稚園・保育園・小学校の教育関係者及び一般希望者

三〇〇円（研究要項代を含む。当日お払い下さい）

五月二十五日までに「はがき」でお申込み下さい。

東京都文京区大塚町三五 お茶の水女子大学附属幼稚園 幼児教育研究会

ご希望の方は五月二十日までにお申込み下さい。二食付一二〇〇円（サービス料を含む）ぐらいにてお世

話いたします。

〔予告〕「本園の教育課程」昭和三十九年度版 刊行の予定、実費にておわかちいたします。

日 程 表

6月7日 (日)	6月6日 (土)	6月5日 (金)	
		受 付	9.00
		開 会 の つ あ い さ	9.30
実 際 指 導			10.00
協 議 会		実 際 指 導	11.00
講 演 船 川 講 師		協 議 会	
閉 会 の つ あ い さ	食 昼	食 昼	12.00
	協 議 会	講 演 坂 元 園 長	13.00
	講 演 津 守 助 教 授	質 疑	14.00
	質 疑		15.00
			16.00

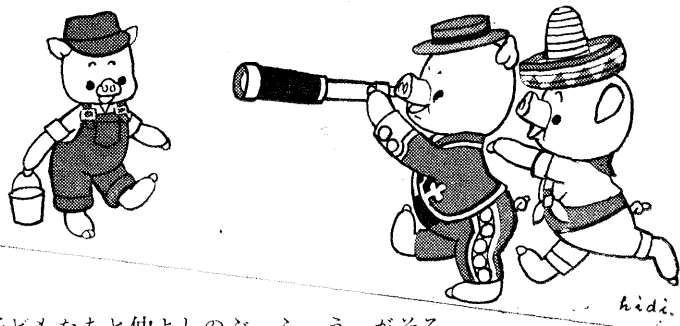
別  
冊

# キンダーブック

春

— 物語絵本 —

ぶーふーうーと ぼうえんきょう



子どもたちと仲よしのぶーふーうーがそろ  
って魚つりに出かけました。そこでふーは  
望遠鏡をつりあげます。さてそれから大へ  
んなことがおこります。別冊春号をどうぞ！

構成・文／飯沢 匡

製作／シバ・プロダクション

定価 50円

幼児の教育 第六十三巻 第五号

五月号 © 定価六〇円

昭和三十九年四月二十五日 印刷

昭和三十九年五月 一日 発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼  
発行者 津 守 真

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三の一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

☆本誌ご購入についてのご注文は発売  
所フレイベル館にお願いいたします。

# ぞうさん

まど・みちお 子どもの歌  
100曲集

ぞうさん・ホタンの  
ぼうや・おさるがふ  
ねをかきました・ふ  
しぎなポケット・つ  
みぎ・つりかわさん  
など代表作収録

装幀・さしえ 和田 誠

B 5 判 206頁 500円

株式会社フレーベル館 発行



坂元彦太郎 著

## 幼児教育の構造

A 五判 二四三頁  
定価 四五〇円

保育の手帖、幼児の教育に掲載した幼児教育論集。幼児教育の基礎的組織、幼児教育課程や指導計画、また六領域についての解説など新幼稚園教育要領の手引きともなる論集。

岡山県保育史編集委員会 編

## 岡山県保育史

A 五判 三六六頁  
定価 一〇〇〇円 上製本

岡山県下における明治期から大正、昭和の戦前、戦後にわたる保育の歴史。保育施設や保育者、研究組織にいたるまで岡山県下における保育資料を収録してあります。

伊藤隆二 著

## 幼児の知能と知能テスト

A 五判 一九八頁  
定価 四五〇円 上製本

幼児の知能のはたらきや発達過程を説き、知能テストの使用法にまで論究した、知能検査のための手引き書。

— フレーベル館の新刊図書 —





4 ～ 5 才 用

さ か な

「きんぎょ きんぎょ」の声を聞くと、もう夏です。そして子どもたちは外へと飛び出します。

子どもたちは、おうちできんぎょを飼ったり、夜店できんぎょすくいをしたり、魚屋の店先や水族館でたくさんのかかなを目にしています。

今月号はうらしまたろうの物語やさかなつくり。画面などを入れて、さかなの図鑑号としました。



5 ～ 6 才 用

ふ ね

子どもたちはのりものが大好きです。とくに広い海を走るふねは、遠くの国を想像させ、はてしない空は、すばらしい旅行を夢みさせます。

しかし、ふねといっても海水浴でみるヨットや、さかなをとる船、大きな客船荷物を積んで走る貨物船など、いろいろな舟があります。

また新しい水中翼船は、ひこうきのような船として興味をいっそう高めてくれることでしょう。

各A4判 16 頁 ・ 定 価 60 円 毎 月 付 録 付

東京 都 千 代 田 区 株 式 会 社  
神 田 小 川 町 3 の 1

フレイブル館

電 話 東京 (291) 7781-5  
振 替 口座 東京 19640 番